
壁の庭

百瀬 和海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁の庭

【Nコード】

N2160E

【作者名】

百瀬 和海

【あらすじ】

大きな壁で隔てられたここは、外界との関わりを断った、孤立した世界。この世界には絶対の規律があった。壁の向こうに出てはならない。壁を越えようとすれば、妨げられる。絶対に、壁の向こうには行けない。本当の自分を取り戻す為、少女は外界への脱出を試みる。

もう八時だよ。

その第一声と共に、掛け布団が勢いよくはぎ取られた。少女は温かい感触を手放したくなく、無意識のうちにしがみついていた。

「ほらシャル、起きなよ」

はきはきとした若さ溢れる男の声だった。まだ眠気の方が勝っており、シャルは目を瞑っている。

どこから漂ってくる香ばしいパンの匂いを嗅ぎながら、重たい瞼を徐々に開いていく。すぐに金髪の少年が映った。顎が少し角張っていて頬に小さなニキビが沢山あるが、笑顔が可愛かった。シャルと同じ十八歳くらいの顔だ。

「もう、シャルったらお寝坊さんだね」

無垢な微笑みを浮かべながら、少年が言う。シャルの眠気を吹き飛ばす程に快活な発声だった。

シャルはゆっくりと上半身を起き上がらせる。右手で、ブラウンの髪越しに頭を触れた。まだ、だるさが残っている。

「どう？ 良い夢は見れた？ ほら、早くこっちにおいでよ」

シャルが何も言わないうちに少年は、近くにある白い正方形のテーブルに着く。

シャルは額を押さえて、ぼうつとしながら辺りを見渡す。小さな部屋で円筒形になっていた。壁は赤青黄と、三原色でひたすら斜線の模様が描かれている。

窓らしき所は、全てにカーテンが閉めてある。外からの光を寸分も侵入させない真っ黒な生地に、無数の黄色い星が描かれている。

「ねえ、どうしたの？ まだ眠い？ 朝食、先に食べちゃってるからね」

少年は両手を合わせ、それから食事を始めた。オレンジ色のフォ

ークで、水色の皿に載ったウィンナーを突き刺す。

「ねえ」

シャルが、起きてから初めての声を出した。右手でまなじりをこすっている。

「あ、やつと眠気取れたんだね」

そう言ってから少年は緑色のコップで何かを飲んだ。次に口元が見えた時、白いひげができていた。

「ねえ」真剣な表情で、シャルはもう一度言う。

「さつきからどうしたの？」

ピンク色の皿に残っていたスクランブルエッグの欠片が、少年の口の中へと消えていく。

シャルは少年の澱み無き目を見つめながら、数多ある疑問の中で最も重要だと感じていたものを、おもむろに訊いた。

「あなた、誰？」

「え？」フォークを握る少年の手が瞬時に止まった。呆気に取られて口が半開きになっている。

「シャル、何を言ってるの？」

「あなたこそ、何なのよ」

シャルが顔をしかめる。大体、何でそんなに馴れ馴れしいのよ。鋭い目つきで言い続ける。

少年の口が僅かに動くが、そのままそつと閉じてしまう。おどおどした仕草は、想像だになかった事態が起きて言葉を必死に探しているようだった。

「僕の事、覚えてないの？」

「全然」シャルの淡々とした返事には、少年への警戒心が顕著に現れていた。覚えてる覚えてない以前に、「知らない」ような気がしていた。

「じゃあ、ここが何処か、とかも？」

「全然」首を左右に振る。肩まで伸びたブラウンの髪が、微かに揺

れる。

こんな円筒形でカラフルな部屋など、絵本の中のように、人生で何度も拝見できるものではない。否応なしに脳裏に焼きつけられてしまう。それを忘れるなど、どうして出来ようか。

「『パルテノン』も？」

「全然」何関連の単語だろうか、とシャルは思った。全く聞き覚えの無い言葉だった。

「じゃあ、やつぱり『世界の壁』とかも？」

「全然」もはや、事務的な答え方になっていた。何を尋ねられようが、単調な回答しか出来ない。今のシャルは、無知なのだから。自分の置かれた状況に呆れて溜め息を吐く。

「自分の名前まで、覚えてないの？」

「それは分かるわ。わたしは、シャルトル」そうそう愛称はシャル、とすぐに少年が声を上げる。

「名前はちゃんと覚えてるんだね」少年が頷く。でも、一体全体、どうなってるんだ。独り言のように呟いては長い首を傾げる。

少年が、テーブルの中央に置かれた、焦げ目の入ったパンに一瞬視線を下ろす。

「一先ずさ、シャルもテーブルに着きなよ。食事しながら色々と話してれば、何か解決するかも知れないし」

食事したって何も解決しないわよ、とシャルは言いたかったが止めておく。少なくとも、シャルよりは少年の方が多くの情報を持っているからだ。

無知な状態で、自分の意見を頑かたくなに主張することほど愚かなことは無い。それをしたいのなら、ある程度の情報を仕入れるのは必要最低限な事項だ、と。

今は少年の言うことに従うほか無い。よそよそしく紫色の椅子に腰を下ろすが、少年が掴もうとしていた芳かんばしいパンを掠め取る。

「僕が先だよ！」少年が、頬を風船みたいに膨らませる。

まだ幼さの残る少年はピサと言った。端正な顔では無いが、可愛い雰囲気漂っている。絵本の登場人物のようだとシャルは思った。

次に、自分がある円筒形の部屋は何処なのかを尋ねる。「ここはシャルの住んでる部屋だよ」と返された。

「全く覚えが無いわ」それならば、どうしてあなたが、当たり前のようにわたしの部屋にいるわけ、とピサを睨みつける。

「僕は、シャルと朝食を食べるのが習慣なんだ」

「そんな習慣、全然知らないんだけど」

「随分と前からこうしてるじゃん」ピサが嘆く。シャルは無垢な少年に対して不快感を抱いた。

シャルの記憶は、白紙の状態なのとは少し違い、記憶の一部が喪失された状態だった。

父親が十三歳の時に、母親が十六歳の時に病気で逝去したこと。それから養子縁組があつて、遠い親戚の家での養女としての生活に困惑していたこと。

しっかりと、自分の辿ってきた人生は存在している。なのに、今ここに至る経緯がシャルには全く分からない。その部分だけが、丸ごとすっぽりと抜けている。

シャルの人生の中にピサの存在は無い。そんな見知らぬ人間に「習慣」などと言われると、畏怖せざるを得なかった。

もしかしたら、記憶喪失などというのは少年のでっち上げた嘘の話なのかも知れない。親しい人間になりすました誘拐犯ではないだろうか、とさえ思えた。自分は正常で、何も知らないのはピサの方では、と。

「やっぱ、僕のこと疑ってるね」ピサが眉を下げる。過敏だった嘘についている人間は、ターゲットの話に敏感になる。己に落ち度は無いかと、必要以上に神経を研ぎ澄ます。そして、墓穴を掘る。シャルが一度ピサに抱いてしまった疑念は、濃くなるばかりだった。「僕が、嘘ついていると思う？」

「ええ、そうよ」何の躊躇いもなく、シャルは冷たく即答する。見知らぬ他人より、自分の方が信用できるに決まっている。

未知なる物への口出しは好ましくない。だが、常識を超える程に未知が過ぎるのならば、外部から口出しをしていいだろう、と。

「じゃあ、外に出ようよ」少年がフォークをテーブルに置き、星空を連想させるカーテンを指差す。

「わたしを人質から解放してくれるの？」

「違っって！」少年の顔の色が赤くなる。

「僕以外の人も、シャルの頭がおかしいって証言してくれる筈だよ」

木のドアは想像以上に軽く開き、軋む音が響いた。部屋から出る一直線に緩く下る階段があった。その先に扉らしき物が見えるがそれなりに距離がある。

ここの壁も光の三原色で塗られたものだった。シャルの部屋とは違い、縦線のきらびやかな模様が描かれている。

窓はひとつも設置されていない。ここは、地下なのかも知れない。人が住む場所というよりは、監禁場所と考えた方が理屈も通っていてしっくりとくる。

シャルは部屋の中にいる時、カーテンを動かそうとしたが微妙だにさせられなかった。何かが引っかかっているのではないかと、カーテンレールを見上げる。本来レールがあるべき場所には、何も無かった。

金具も付けられておらず、まるで、天井から床に向かってシルクのカーテンが生えてきたかのように繋がっている。

ピサは、最初から完全に固定されていると言った。元からそういうデザインなんだ、と。

カーテンの横から窓を覗く。窓にはシャッターが下りていた。これも固定されている。外に出なければ、日照を拝めないらしい。

次の部屋も円形でカラフルだったが、シャルの部屋よりは大きかった。中央には巨大な螺旋階段があり、部屋の半分以上を占めている。

天井や床にもそれを通す為の巨大な穴があけてある。実は円筒形ではなく、ドーナツ型の部屋なのかも知れない。

「このアパートの階段だよ」

「ここ、アパートだったの？」

「うん。無駄に大きいけどね」ピサは誇らしげに胸を張っている。

確かに、シャル達が入ってきた扉以外にもいくつかある。螺旋階

段を挟んで反対にひとつ。左右にもふたつある。東西南北に設計されているようだ。

「ここは三階なんだよ」螺旋階段の中央部分を少年が指差す。そこには数字で「3」と書かれた看板が吊されていた。

無駄に大きな螺旋階段を下りる。閑散とした空間に足音が響く。途中で、また広い空間が現れた。

やはり東西南北に扉があり、看板には「2」と書かれている。これが、ここでの「階」なのだろう。

やがて「1」と書かれた看板が現れるが、広い空間は無かった。落莫とした狭い空間に質素な扉がぽんとあるだけだ。

扉は木造だが、少し重みがあった。レバーを右手で引き、左手を扉に添えて、押す。すぐに、柔らかな日差しがシャルに降り注いだ。絵本のようなデザインのアパート。その外には、やはり絵本みたいな光景が広がっていた。十二色の絵の具で色づけしたかのようなシンプルな色のみで構成された世界がそこにはあった。

緑の芝生が辺り一面に広がっている。茶色の巨大な樹木のような物がいくつも広い間隔を空けて佇んでいる。枝条と比べると樹幹はとても大きい。振り返れば、視界に入りきらない程の巨木がそびえ立っていた。

「このアパートは巨木をイメージしてるんだよ。僕達はさっきまで、この中にいたんだ」

ピサの声には感情が籠もっていない。もう、「当たり前過ぎる」のだ。

巨大な樹幹に螺旋階段や部屋などの全てが入っているのだと、ツァーコンダクターさながらの丁寧な解説をされた。

「これで、少しは謎が減ったでしょ」とウインクをしてくる。なるほど、とシャルは頷く。謎が余計に深まっただけだった。

ミステリーツアーならばきっと、両の手を叩いて大いに歓声があるだろう。シャルは、自分の頬を両の手で強く叩いてやりたかった。それで、いつものベッドの中で目を覚ませたならばどんなに幸

せだろうか。

シャルは改めて巨木型のアパートを見上げる。この中に人の住処があるんだ……。北欧神話に出てきたユグドラシルを思わせる。

空は色紙なのかと錯覚させる程の完全な水色。その中に、羊を連想させるものもこととした真つ白い雲がある。形も大きさも、全ての雲が同一だった。

「この空、作り物？」シャルの人生においてこのような青空はあり得なかった。

「うん」ピサの表情が沈む。明るい景觀とは不釣り合いだった。

ピサはしばらく黙り込んだ後に、「凄く綺麗でしょ」と言う。笑ってはいるが瞳は陰ったままで、シャルには空元気に思えた。

遙か彼方に壁が見えた。ずっと真横に伸びている。シャルは精一杯に首と眼球を動かしたが、切れ目は発見できなかった。

「あれが、『世界の壁』だよ」既にピサの表情は明るく、心情は読み取れない。

「世界の壁って、隣国との境界線ってこと？」

「いや。そもそも国なんて概念は存在しないよ」

「国が無い？」シャルには全く意味が分からなかった。国が無いなど、あり得ない。あの世とかいうわけ、と半ば投げやりに言葉を吐く。

「ここは、そのものが『世界』なんだ」

「セカイ？」シャルはまるで初耳だったかのように片言で尋ねる。

「そう、世界。とても平和なんだ。」

「ここ以外にも、世界があるってこと？」

「うん。いくつも存在する世界のうちのひとつ。壁で区切られた世界。ただし、ここは外界との交流を完全に切ってるんだ」

シャルが目を大きく見開く。「外界、交流」と、定期試験を控えた学生が単語を暗記するように繰り返して呟く。

ピサはそんなシャルの様子を見て、「僕も外界については知らない

いよ。行ったこと無いんだから」と先手を打った。

「外部との交流を断つなんて、まるで鎖国みたいね」シャルが皮肉るが、少年はぼかんとした表情でいる。

「サコク？」

「わたしの祖母が日本人でね。昔、教えてくれたの」

「二、ホンジン？」間違えた発音で、ピサが訊いてくる。

「ジャパンのことよ。アメリカにべったりしてる。まさか、それも知らないの？」

案の定ピサは「アメ、リカ？」と知らないようだった。

日本や米国すら遠い存在とは。自分が生きてきた世界とは全くの別物であることを、シャルはいよいよ実感してくる。

「世界の壁には、絶対に近付いちゃいけないから！」

ピサは子供を叱りつける親のように、シャルに強い口調で忠告した。

シャルは即時に承諾した。閑却できない問題ではあるが、既に気が滅入っており、休息をしたかった。それを打ち明けると「近くの公園のベンチで休もう」とピサに提案された。

かくして、今は公園に来ている。辺り一面に広がっていた緑の芝生は、例外なく公園をも埋め尽くしていた。

日常的に見掛ける大きさの樹木が整然と並んでいる。葉は芝生と全く同色の緑で、時折葉と芝生が混ざって見えてしまう。

そんな並木の近くに真つ白いベンチがあり、二人は腰掛ける。園内に人影は見当たらない。「シャルの間違いを証明してくれる誰かは現れない。

「全然誰にも会わないじゃない」シャルがむつすりとした顔で言う。ピサは一旦腕時計に目を配り、シャルに視線を戻す。

「まだ、朝早いからね。もう少ししたら『パルテノン』にも会えるよ」ピサの口辺が微笑んでいる。

「パルテノン？ 人の名前？」

「半分正解」とピサは得意げにニヤつく。クイズ番組で、司会者が難問を出題して優越感に浸るのに似ている。

半分とは、果たしてどういう意味だろうか。シャルが顔を横に傾けた時、園内の入口の方から大量の足音が聞こえてきた。地面につけた足裏に小さな振動が伝わってくる。

「誰かくる？」

「パルテノンさ」

シャルの視界に「パルテノン」が映る。自らの目を疑った。駆け足でふたりの眼前を通り抜けたそれらは、身長が一メートル程で、

異形の姿をしていた。

シャルが最初に気になったのは色だった。全身が紫紺。体毛ではなく、肌そのものが紫紺のようだ。

人間のそれとは比べものにならない程の大きさを持ったくりくりとした青眼、鼻はトナカイのように丸く膨らんでいて、口の両端は鼻と同じ高さまで延びている。

奇怪な部分が多いが、体型だけは人間の子供と大差なかった。真っ青な短パンに真っ赤なノースリーブを着ている。

目を疑いたくなる、非現実的な生き物だった。絵本の中にいるのではと錯覚させられるこの奇妙奇天烈な世界においても、彼らの色はバランスが悪い。

「まさか、『あれ』がパルテノンなの？」シャルは目をしばたかせながら言う。

ピサがはたと睨んでくる。「『彼ら』が、パルテノンだよ」

「何の動物？」

「パルテノンは、パルテノンさ。人間と同じで、ひとり、ふたりつて数えるんだよ」

パルテノンの群がりの中に、赤と白のしま模様が入ったボールが見えた。ひとりのパルテノンが、ボールを持つというよりは赤ん坊を抱きかかえるようにしている。

「お姫様だっこしてもらえるなんて、あのボールはさぞや幸せね」シャルが嫌みを言う。

ピサは少しの間沈黙していたが、「そうだね。幸せだろうね」と子供を見守る父親みたいに、強く温かい口調で言った。シャルには、ピサの瞳が潤んでいるように見えた。

パルテノン達が、円形に間隔を広げる。ボールを持ったパルテノンに全員の視線が集まる。シャル達の座るベンチからでは遠くて聞こえにくいが、彼らが声を出してはしゃいでいるのが分かった。

枝のようにすぐに折れてしまいそうな細くて短い腕が、ボールを空中へと弾き飛ばす。見た目によらず、ボールに大した重量はない

のかも知れない。

微風が吹いていたがボールは綺麗な弧を描いて、正面のパルテノンの元へと落ちていく。すぐさまにそのパルテノンが、これまた華奢な腕でボールを上へ弾く。その姿は、シャルにバレーボールを連想させた。

「あれって、バレーボールをしてるの？」

「ばれえぼある？」これも、この世界には存在しえない単語らしい。パルテノン達は芝の上を低く飛び跳ねながら、ボールを空中に舞わせている。小さな体に特殊な身体能力が秘められている訳でもなく、「低く飛び跳ねている」というよりは、あの跳躍が「最高到達点」ではないかとシャルは思う。

「彼らは、この世界が平和だという象徴なんだ」やはりピサは、優しい表情を浮かべている。

「さっきあなたが言ってた、半分正解ってのは？」

「パルテノン達と対面してみれば、解るよ」

そう言うと、ピサは真っ白いベンチから勢いよく腰をあげ、紫紺の群れへと走り寄っていった。シャルはただ呆然と、少年の背中が小さくなっていくのを凝視し続ける。

パルテノン達の視線がピサに集中する。シャルには聞こえないが、何か会話しているようであった。程なくして「バレーボールもどき」が再開された。

ピサとパルテノン達の身長には倍近くの差がある。ピサは膝を少し曲げて窮屈そうに参加している。

ピサの所へボールが飛んでくると天を仰ぐように両手で構え、膝のバネを使ってボールを高く上げる。まるで、バレーボールのオーバーハンドパスだ。

ボールが高く上がる度にパルテノン達は歓喜の声をあげた。人間の幼子とあまり変わらない。

シャルは、その様子をベンチから白眼視し続けていた。例え人間の子供と同じ心を持っていたとしても、紫紺の奇形生物を同一視で

きなかった。

それからピサは、三十分程をパルテノン達と共にした。あからさまに冷淡な表情を浮かべるシャルの元へゆったりとした歩調で戻ってくる。

「ね、可愛いでしょ？」ピサの顔からは沢山の汗が噴き出している。
「そう。それは良かったわね」シャルは唇を尖らせながら応える。
「う、うん」ピサは寂しそうに眉をひそめる。

ピサの後方には、未だ楽しそうに「バレーボールもどき」で遊んでいるパルテノン達の姿があった。

公園はシャルが想像していた以上に広がった。パルテノン達が遊んでいた芝生のエリア以外にも、ジョギングとして使えそうな長い並木道があった。

当然、木立たちは茶色の幹に緑の葉。舗装された道は灰色で、先程のように生木と足元が同色で折り重なって見える事が少ないだけ、幾分かは好ましく思えた。

無論、色彩豊かだったが、シャルと肉親の住んでいた家の近くにもこんな公園があった。シャルはどことなく懐旧の情にかられてくる。

「おやおや、ピサ君にシャルトルさんではないですか」

突然、シャル達は見知らぬ老夫に声を掛けられた。黒いスーツに赤いネクタイ。右手にはステッキが握られているが、姿勢はぴんと張っている。

紳士としての品格が体中から溢れ出ている。お洒落に整えられた口と顎の髭が一際目立つ。

「ゴアさん！」ピサは笑顔を浮かべながら声を出す。

「このような場所で会うとは、奇遇ですな」そう言って、紳士は口髭を少し触れる。

「そうだね。ゴアさんも公園を散歩してるの？」

「ええ。わたくし、公園での散歩を日課としているのですよ。日頃から適度な運動をしておかねば」

地を突いていたステッキを、くるりと宙で一回転させる。伊達のステッキみたいだ。

何、この変人！シャルは心の内側で、何度もそう言っていた。物語の世界に登場しそうな紳士を、そのまま現実世界へ引きずり出してきたような、生活感のない非現実的な人間だ。

「おや、シャルトルさん。浮かない表情をされていますな」

初見の紳士が、気安く話し掛けてくる。まるで、シャルとは知人であるかのように。

「はじめまして」眉根を吊り上げながら、シャルはとげとげしく言う。初対面なんだから、当たり前でしょ。

「おお、挨拶がまだだったとは！ 紳士としてあるまじき行為でした」シャルトルさん、こんにちは。ぺこりと頭を下げてる。

「はじめまして」語調を強くして、シャルが再び言う。

まだ、紳士の表情は崩れない。「シャルトルさん、『はじめまして』とは、初対面の人に使う言葉ですぞ」

「だから、はじめまして、なんですよ」シャルは自分の非を認める気はない。自分のことを一番信用しないでどうする、と。

「ゴアさん、今日のシャルはずっとこんな調子なんだ」ピサは両手をあげて、お手上げです、と表現する。

「それはそれは」先程から、紳士の表情や語調は何ら変化が無い。

「ゴアさんからも言っただけよ。シャルは前からここにいてよって」

ピサにそう言われ、紳士はシャルの目をじっと見つめてくる。やや沈黙に包まれた後に口を開く。

「シャルトルさん、あなたは絵を描くのが好きだった。よくパルテノンや御自分のアパートをスケッチされては、みなさんに絵を見せていた。そんな時のあなたの笑顔は、輝いていて素敵だった。楽しかった日々を忘れられてしまったのですか？」

知らない。そんな日々など、全く覚えがない……。

「そ、そんなの、わたしは知りません！」

シャルのあげた声が、静閑とした園内に小さく響く。紳士は表情を同じにしながらピサと顔を見合わせる。

「これは、なかなかどうして厄介ですね」

「うん、僕のこと覚えてなかったんだよ。誘拐犯って勘違いまでされてるし」

首を傾げながらシャルの方を見てくる。哀れみを含んだ瞳をして

いる。

「だって、親戚の叔父さんや叔母さんのことは頭に残ってるのに、あなた達のことなんて、顔すら覚えがないのよ！」

ピサと紳士は顔を合わせながら、ひそひそと話している。時折こちらを横目で見てきた。

「あなたはいつもスケッチブックと鉛筆を持ち運び、気に入った風景があればその場に座り込んでクロッキー（速写画）を始めます。ある程度を書き終えると、本格的に描き出す。『いつもの習慣』です」

「そうそう、スケッチの途中でパルテノン達のボールが直撃したりして。シャルが真っ赤になりながら頬を風船みたいに膨らませてて面白かったよね」

「おお、そんなこともありましたな」紳士が相づちを打つ。

「確か、シャルが十二歳の頃だよな」

「十二歳!？」シャルは思わず声を張り上げてしまう。一瞬、めまいがシャルを襲った。

十二歳といえば、まだ父親も生きており母親も専業主婦をしていた頃だ。当然、この非現実的な世界に來た覚えなど無い。

それなのに、このふたりは、シャルの十二歳の頃を懐かしそうに語っているのだ。

何かがおかしい。そうシャルの脳内に響き渡った。

十二色でつくられた風景や巨木のアパート、世界の壁、パルテノン、想像の中でのみ生きる事が許されていた筈の紳士。

元からこの世界はおかしかった。しかしそれは自分の知識の範囲外なんだ、と渋々受け入れている節はあった。世の中は知らない事の方が多いんだ、と。

自分はそんな非常識な世界に何かしらの異常現象で放り込まれてしまった。数日、数週、数ヶ月、はたまた数年か。既にこの世界に滞在していて、今日の朝に記憶喪失になってしまったのかも知れない。

だがしかし、自分の覚えている過去すらも彼らは否定する。記憶の中に生きている両親が、これでは幻だったみたいではないか。

シャルはおそろおそろ、ゆっくりと、口を結んでいた糸をほどくとても恐ろしい質問だった。

「わたしは、いつからこの世界にいるの？」

シャルが十二歳の時、一番色濃く思い出に残っているのは、十三歳の誕生日を迎えようとしていた頃の事だ。

シャルの家に友達を呼んでバースデーパーティが開かれる事となった。招待人数は十三人。十三歳の誕生日だから十三人。縁起をかつぐ為にだ。

月刊誌の巻末に占いのコーナーがあり、「今月誕生日を迎えるあなたは、縁起をかつぐと幸せになれるでしょう」と書かれていた。

その占い師は当時、女性から絶大な人気を誇っていた。占いがよく当たると、どこからともなく噂が広まり、テレビや雑誌などのマスメディアで頻繁に取り上げられ、時代の寵児ちやうじとなっていた。

そんな占い師が「縁起をかつげ」と書いているのだ。当時その占い師にどっぷりとはまっていたシャルとしては是非ともそれにならなかった。

そこで、誕生日会に招待する人数を十三と定める。何とも突発的な発想であった。

「そんな、十三人も呼べる友達いるの？」母親は言った。

「うん。頑張れば余裕だよお」

オープン型のキッチンで忙しそうに夕食を作っている母親の近くで、シャルはあどけない笑顔をする。

「流行りものって、怖いわ」母親が顔をしかめる。

「じゃあ、来年は十四人。シャルが五十歳の時には、友達を五十人も呼ばないとな」

ソファに座りながら父親は楽しそうに声を上げる。シャルがキッチンからソファの方に小さく駆けてくる。

「パパあ、その頃にはあの占い師さん、消えちゃってるよあ」

シャルの大人びた、現実的な発言を聞き、父親は啞然とする。眼前の、ようやく十三歳になろうとする娘の顔は、まだまだ幼い。

結局、シャルのバースデーパーティに招待されたのは五人。元来、シャルにとつて友達と呼べる人間は五人だけだった。

他の八人は単なる同級生というくらいで、無理やり招待客に含めようとしていたのだ。

シャルの誕生日が迎えられる前に、例の占い師が麻薬所持で逮捕された。それを聞くと、シャルはすぐに十三枚の招待状を破り捨てた。

封筒やカードのデザイン、それに書く文章やペンの色など、シャルの貴重な時間をたくさん奪い取った招待状はただの紙くずとなった。

「占いなんか、単なる気休めだよあ。自分のやりたい事をするのが一番！」シャルはあっけらかんとしていた。

「流行りものって、怖いわ」母親が顔をしかめる。

「いつから何も」

流暢に発せられていた紳士の声が、そこでこもる。機械のように滑らかに動いていた口が活動を停止した。

シャルは生唾を飲み込んで、紳士の口元を熟視する。再び活動を始めるその時を、待つ。

微かに吹いていた風が止んだ。遙か遠方でパルテノン達のはしゃぐ声がしている。

果たして、自分の記憶が間違っているのか。彼らの述べる、覚えのない自分の記録が本当に存在しているのだろうか。

紳士の唇が微動する瞬間を見守り、シャルは目を皿のようにした。「あなたは、この世界で生まれました」

一番聞きたくなかった最悪の言葉が、発射された。シャルの胸に、

矢となつて突き刺さつた。

シャルは勢いよく膝をつく。重力を人一倍強く受けたかのように、重く沈んだ体勢となる。視界には、邪悪で不確かな暗闇が、シャルを包み込むように充溢じゅういつしていた。

「あなたの父親は四年程前に、母親は二年程前に病気で亡くなられました」

自分の記憶が、目で見て、耳で聞き、肌で触れてきた体験が、その全てが否定された。

あの十二歳の誕生日も、これまで歩んできた人生の全部が幻想だった。それは煙のように、何処かへと漂うように消えていつてしまった。

「そんなの、嘘よ」

「辛いのは分かるよ。でも、事實はどんなに否定しても変わりはないんだ」

ピサの目は力強く、シャルの事をしっかりと捉えている。もうこれ以上反論の有無を許さないぞ、と揺るぎない意志が宿っていた。

「いやあああああ!!」

シャルの絶叫は遠く彼方まで響き渡つたのかも知れない。先程まで微かに聞こえていたパルテノン達のはしゃぎ声も、もう聞こえない。

無論、シャルの目の前にいる少年と紳士も言葉を出せずにいた。

シャルはその場から全速力で走り去つた。後方で誰かの声が聞こえた気がしたが、振り向くことは無かつた。

近付く程に世界の壁は巨大になっていく。質素ながらずっしりと構え、シャルを出迎えた。

正確には、シャルはまだ壁に触れられる距離までは到達していない。世界の壁が発散する不気味な靈気が、シャルの頭を撫でてきたのだ。

この壁の先には、別の世界がある。自分の元いた世界が、待つてくれているかも知れない。

辺り一面に広がる緑の風景は堂々とその場に留まり、ただただ巨大な壁だけが大きくなっていく。

壁の先には神異で美麗な青空が広がっている。確かにこちらとは違う。しかし、本当に乗り越えただけで「別の世界」に移動したことになるのだろうか。

シャルはふと緑の芝生の中に赤い色を見つけた。互いに補色を為していて、くつきりと目に立つ。慎重にそこへ歩を進め続ける。

芝生に幅広の赤い線が引かれている。それは世界の壁のように、どこまでも横へと広がっている。

シャルは一旦歩みを止め、辺りを見渡した。無知な世界では観察を怠れない。致命的な失敗を起こしかねない。

赤い線を越えた少し先に穴があるのを発見した。人ひとり入れるくらいの穴が、緑の芝生の中に見事に紛れ込んでいる。一つや二つでは無い。散在している。落とし穴だろうか。

今時、こんなのに引っ掛かるわけ無いでしょ。シャルはそう高を括り、再び歩を刻み始める。

シャルの右足が、赤い線を越えた先にある緑の芝を堂々と踏み締めた。別段、問題は発生しない。

やっぱり、単なる思い過ごしだったのね。世界の壁は、もう目と鼻の先だ。

シャルは世界の壁を間近で見上げてみる。背はマンションの三階分くらいはありそうだ。

「世界」なんて大それたものを区切る境界線が、マンションの三階分程度の高さとは。やけにお粗末ではあるが、シャルの地力で登りきれぬものではない。

そんなあ。シャルは長嘆息する。何か他に方法は無いのだろうか、とその場で考え始める。

レンガ色の壁は垂直にそびえ立っており、人間の手で登るなど不可能だろう。当然、はしごやロープなどは掛かっていない。

シャルは、このまま壁に沿って歩いてみようかと思いついた。水平にずっと横へ続いてはいるが全ての箇所が同じ高さとは限らない。もしかしたら、人が乗り越えられる程の極端に低い場所があるかも知れない。

小さな希望を抱きながら、シャルは壁と平行に歩き始める。

その時だ。

突如、背後に気配を感じた。シャルは間髪入れず、体を後方に捻る。

そこには、二足歩行で二メートルほどの大きな図体を持つ、熊と人間を足したような黒い生物がいた。

全身の黒色の中で、銀眼が不気味にきらきらと輝いている。しっかりと、シャルの姿だけを捉えている。

「な、なによ！」

後退りながら、シャルはか細い声で精一杯に威嚇した。

だが黒色の生物に通じることではなく、こちらに堂々と悠然とした足取りで近寄ってくる。

自分の半分くらいの背しか持たない紫色のパルテノン。今は対称に、眼前には、自分を鳥瞰ちようかんするように視線を下ろす黒い大きな奇形生物がいる。

シャルは小刻みに身震いをした。総身に粟あわが生じた。汗が、こめかみの熱を冷ますように出てきては頬へと伝った。

黒色の奇形生物はじりじりと、確実にシャルとの距離を詰めてくる。

威嚇や警戒といった様子など一切見せず、ただゆっくりと事務的な態度で足を運んでいる。

シャルは倉皇^{そうこう}としながら、震える両脚へ精一杯に力を込め、素早く後ろへ動かした。

焦燥感の所為か、なだらかな芝生に躓^{つまず}いた。

体が一瞬、宙に浮いた。地に足がついていない、人間と一生を共にする重力から免れたような不思議な感覚だった。

「きゃッ」背中と後頭部に電流のような痛みが走り、肌には芝の冷たさが伝わってきた。

途端に、造られた蒼空が視界の一面に広がった。そこに大きな黒い塊が割り込んで影をつくる。

影の中に光る銀眼の鋭さは先程から微々たる変化もせず、シャルの怯える顔だけを映し出している。

激しい呼吸の波音を口内に留められない。心臓が早鐘を打っている。

「や、やめて！ なにするつもりなの！！」

銀眼の魔物が作りだす暗闇が、シャルに覆い被さる。気が付けば、体が宙に浮いていた。

黒い生物に抱きかかえられていた。異常な腕力だった。

やめて、と叫び声をあげながら、シャルは必死に黒い生物の腕から逃れようとじたばた抵抗した。

しかし、黒い生物の腕は微動だにしない。まるで、無機質な機械にがつちりと固定されているようだった。

黒い生物は事務的な動作で付近の穴まで静かに歩み寄る。

これから何が起きようとしているのか。ようやくシャルは理解した。

黒い生物は穴のすぐ手前で立ち止まり、腕を伸ばす。シャルの体は、穴の真上にある。黒い生物の立派な太い腕だけが支えとなって

いる。

シャルが再びじたばたと暴れる猶予も与えずに、黒色の生物は腕を大きく広げた。

シャルの意識は、身体と同じように、深く真つ暗な奈落へと落ちていった。

「シャルちゃん、今日からよろしくね」

叔母と叔父の目尻のしわが深くなる。自分の為に無理やり笑顔を作っているのだ、と幼いシャルには分かっていた。

母親が肺癌で死んでから間もなく、叔母と叔父の家に養子として迎え入れられた。

叔母はシャルの母親の姉に当たる。一年間に二、三回くらいはシャルの家へ遊びに来ており、顔馴染みだった。

叔母のことは嫌いではなかった。寧ろ、シャルはとても叔母に懐いていた。

しかしそれでも今、叔母や叔父に心を許すことが出来ない。

これからずっと一緒に暮らしていくのだから。親戚として接してきた今まではわけが違ふ。

「シャルちゃんのお母さんみたいにはなれないけれど、精一杯に頑張るからね」

叔母の目は真つ直ぐにシャルを捉えている。きりりとした表情は、自分自身に誓いを立てているようであった。

逆にそれが、シャルに余計な精神的圧迫を与えていた。気まずさは増しただけだった。

それからはずっと、義父母の家での生活が続いていた。胸が張り裂けそうな程の痛苦と、自分自身との戦いだった。

絶妙な温度をもった風が肌を撫で回した。今の孤独なシャルには、何故だか両親の温もりを感じた。

シャルの心を蝕もつと視界を覆っていた闇が、霧のようになって撒布されていく。光がやや乱暴に差し込んだ。

幼児が描いたような樹木が、瞼の隙間に入ってきた。自然と両手両足を広げ、体を大の字にさせて仰向いた。

辺りにある沢山の樹木は、シャルを囲むように高くうねりながら伸びているように見え、靈妙な迫力がある。

まるで、昆虫になった気分だった。樹木たちの隙間に蒼天がある。唯一、人間の視点時と大差ない壮大さを持っている。シャルはただぼうつと見つめ続ける。

「なあ」

突然、高い所から渋い男声がした。樹木から声が発せられたのかとシャルは思った。

芝生の上に載せられた頭を、後ろへひねる。後頭部に奇妙な、先程の転倒時の痛みには及ばないが、電流のような痛みが走った。

小さな苦痛の所為で、少し顔を歪ませていたのかも知れない。「大丈夫か？」とまた渋い声が聞こえた。

同時に、シャルの目には青年が逆さまに映っていた。渋い声とは不釣り合いな、端麗な顔をした青年だった。

シャルはすぐに両肘で芝生を勢いよく突き、上半身を起き上げらせる。下半身を引きずりながら後ろへ振り返る。

「あ、無理に起きなくても良かったのに」

青年はばつが悪そうに眉間を歪ませた。繊細なきれのある眉毛をしている。

髪は赤褐色のショートヘア。顔の輪郭は丸型で小さく、体型もすらりと細長い。

まるで、女を見ているかのようだ。渋い男声を耳に入れなければ、男と判別できなかった。

Tシャツにジーンズとラフな格好をしている。なのに、常人には出せない特殊な靈気が漂っている。世界の壁に撫でられた靈気とはまた違った靈気。

本来、男に適切ではないのだが、「格好いい」というよりは「艶めかしい」とシャルは感じた。

女すら惚れ惚れとさせてしまう、女らしい色気をもっている。路上ですれ違っただけでも、誰もが立ち止まりつついつい見とれて

しまいそうな美しい青年だ。

だらしなく口をぽかんと開けて熟視していたシャルだが、はっと我に帰る。

「あ、あなた誰！」

この男もわたしのことを昔から知っているとかい出すんでしょ、と警戒心を強く抱き、身構える。

「あ、俺？　俺はケルン。お前は？」

「え？」わたしのこと知らないの、と呟く。

ケルンが口元を歪ませる。そんなしわですら美しい。

「何言ってるんだよ。俺たち、初対面じゃんか」

「え？」シャルは目を丸くして、しばたたく。

この世界の住人たちは、シャルはこちらで生まれたと言っていたのに、今、目の前にいる女顔の青年は「初対面」だと言っている。

本当に、今まで一度も会ったことがないのだろうか。記録の中の自分は、この狭い世界に十数年いる筈なのに。

「あなた、何者？」

「は？　だから、ケルンだって」語調がやや乱暴になってくる。

「違うつて」

「違う？」ケルンは首を傾げる。

「あなた、何かが違う」

ケルンは黙り込んでしまう。シャルは、青年が顔をうつむけたときに見える長いまつげを見つめてしまう。

見とれてはいけない、と心の中で何度も復唱していたのに、うっかり凝視してしまった。頬が火照る。

ふたりの空間がだんまりむっつりとなっていたが、園内のどこからかパルテノンたちのはしやぎ声が小さく聞こえた。

「なあ」ケルンが気まずい空間に振動を与える。

「一先ずさ、どこかのベンチに座って、それからゆっくりと話そうぜ」

そう言えば、なんでここに戻ってきてるの？

園内に敷かれた濁り無き緑の芝生に視線を向けながら、シャルは世界の壁周辺でのことを思い起こす。

世界の壁は境界線というだけあって流石に高かった。あの壁を越えるなど、常人には到底為せないだろうと思った。

それで、壁に沿って歩くことにした。どこかしらに抜け道がないかとシャルは変な期待を抱いていた。

そうしていると、大きな図体をした黒色の生物が現れた。人間の体に熊の体細胞を注入したかのような容貌だった。

逃げようとしたが躓いた。熊に似た生物にお姫様だっこをされ、穴に落ちた。

そして、そこから先の記憶が無い。

次に記憶がある部分を思い出そうと、必死に脳に問い合わせてみる。

すぐに繋がった。気付けば、先程ピサたちと別れた公園内に寝転がっていたのだった。

世界の壁と公園の間にはかなりの距離がある。既にその間を歩いていて実証済みだ。

誰かが、暗くて深い地獄行きのようなあの穴から自分を救出し、それでいて更にこんな遠くまで運んでくれた、というのだろうか。

それとも、あの穴はこの公園内に繋がっていたのであるうか。そんな馬鹿な、とあざ笑えない自分がいる。

この世界はそのものが不思議なのだから、何が起きてもおかしくない。

そう割り切れてしまえそうだから、怖い。

「おいおい、俺と話したかったんじゃないのかよお」

荒々しい言葉がシャルの耳に入ってきた。どすの利いた声音なの

に何故か繊細な印象を受ける。

シャルは閉じていた瞼をゆっくりと開ける。女以上に女らしさを持った、美しい青年の顔が右側にあった。

辺りには相も変わらず、子供のお絵かきのような十二色の風景が広がっている。

木や芝生、歩道、ベンチ。園内のどこに行ってもカラーコピーをしたような、全く同一の物たちしかない。まばらに、統一性のない並び方をしているからこそ生命を感じられる木立も、一定の間隔で綺麗に並んでいる。

こんな生気の薄い景観ばかり見ていると精神的に参ってしまいそうだ。シャルは無意識のうちにため息を漏らしてしまう。

そこで、はっと気が付いた。眼前にはケルンがいた。白いベンチにふたりで座っていたのだった。

「その気持ち、分かるぜ」

ケルンが苦笑する。その美しいブルーの瞳には同情の色が混じっている。

「わたしの気持ち、あなたに分かるわけ？」

シャルはついつい棘のある言い方をしてしまう。警戒心が残っていたのではなく、緊張からだった。

両手をおおっぴらに広げられない窮屈な空間で高級品に囲まれているような、自分の動作のひとつひとつが価値ある物を破損する事態に結びついてしまうのではないかと不安に駆られるような、そんな緊張からだった。

「ああ、分かるさ。俺たち、異世界の人間同士だからな」

ケルンが口の端を吊り上げる。

「え？」シャルは哑然として、ケルンのにやけた顔に目を凝らすしかない。

「お前、この世界の人間じゃねえんだろ？」

事実を確認するように訊いてくる。全てを確信している笑い方をしていた。

「そうよ」

「だろ」

そこでケルンの言葉を抑止するように、パルテノンたちの騒ぐ声が割り込んできた。

ふたりをなぶるように生ぬるい風が吹き抜けた。園内の緑たちが一斉に同じ方向へ小さく靡いた。

木の葉が散ることも無ければ、芝生に落ちている葉すら一枚たりとも無い。樹木が機械で出来ていて、葉が電動で揺れ動いている。しかしシャルには思えなかった。

「気付いたら、この世界の住人になってた」ケルンが真摯な表情しんじをしている。

「わたしも」

「お前も、記憶喪失だろって言われたのか？」

「ええ。知人を装った誘拐事件かと思った」

「でも、この世界の住人全員が違うって証言したんだろ？」

ケルンはしんみりと言う。同じ境遇のシャルから共感を得ようとしているみたいだった。

「この世界の住人全員ではないけど、紳士にも言われたわ。『この世界で生まれた』って」

「おっ、それゴアだな」ケルンは歯を剥き出して笑う。

シャルは、何が可笑しいのよ、と思いながら「そう、物語みたいな紳士よ」と返す。

ケルンが嘔き出しながら愉快そうに手を叩く。ベンチに深く寄りかかりながら真っ青な空を見上げた。

「ありやあ、傑作だな」

「傑作？」

「今時、物語の中でだってあんなのいねえよ。あり得ねえ。ナンセンスだぜ」

ケルンは口元に紳士の髭を想定して引っ張っている。

非現実的な世界に戸惑っていて、シャルには精神的な余裕など無

かった。

シャルに限らずとも誰だつてこの状況に陥れば同じになる筈だと思っていた。習慣や常識が崩れるとは、想像以上に苦痛なことだった。

それなのに、ケルンは無邪気な笑みを浮かべている。

「なんで笑つてられるの」

「ん？」

「笑つてる場合じゃないでしょ！」

シャルの怒声に驚愕したのか、ケルンはぽっかりと口を開けている。シャルの目だけに焦点を合わせている。

「あなた、元の世界に戻りたくないの」

シャルは手のひらに爪をくい込ませ、強くぎゅっと握りしめた。痛かった。だがそうしなければ、目から涙が溢れ出てしまいそうだった。

ケルンは、ただ袖手傍観しゅしゅぼうかんしていた。たつぷり間を溜めてから口を開ける。

「俺は、この世界を愛しているんだ」

「は！？」

予測していない回答だった。あまりにも馬鹿馬鹿しく感じて、シャルは素っ頓狂な声を出してしまった。

「あのな」ケルンは長嘆息してから続ける。

「なんでもかんでも否定してたつて、物事は解決しないんだぜ。俺は、受け入れることにしたんだ」

ケルンの青眼は立てた誓いを自分自身に確認するようだった。

「受け入れる？」

「そうだ。現実的だとか非現実的だとか。そんな戯言言つてたつて仕様がねえよ。目の前に存在してるんだつたら、間違いなくそれが『現実』だろ？ 認めるしかねえだろ？」

そう、確かにこの馬鹿げた幼稚な世界は存立している。シャルにとつては不本意だが、認める他ない。

「そうね。これが夢だったら良かったけど」唇を歪める。

「俺から言わせてもらえば、なんでもかんでも拒絶する奴なんてのは、ただ現実から逃げてるだけだ！」

ケルンがまくし立てるように乱暴な口調で言う。どことなく義憤が混じっている気があった。

「でも、疑う心つての必要よ。詐欺に合うわよ？」

「違う！」と一際強く発してから、「見極めようとする心も必要だ。バランスが大切なんだ」と繋げる。

「なんだか、それはそれで疲れるわね」

「ああ、人生は複雑で面倒くせえ。いつそのこと、シンプルなアメーバにでもなりてえよ」

そう言つてケルンは舌打ちをし、またベンチの背に深く身体を預け、青空を見上げる。口元が弛緩している。

シャルはそんなケルンをずっと静観し続ける。あまり視線を向けてはいけないという自分自身に課した規定をすっかり忘れていた。

自分の頬が紅潮していることにも気付いていなかった。

青年は依然として女つ気を存分に放っている。しかしそんな外見とは裏腹に、男つ気が内から沸き出ている。シャルにはそう感じられた。

もしかしたら、本人は「艶めかしい」外見を嫌忌しているのではないかと考える。だから無理して男っぽい仕草を心掛けているのでは、と。

この世界ではどうなのかは知らないが、元いた世界では人々の視線を独占していたのは輕易に想像がつく。

「注目を浴びられるなんて寧ろ幸せなこと、それ以上欲張るな」と色情を混じらせて文句を言う人間も当然いるだろう。

しかしケルンの場合は「男っぽい」では無く、「女っぽい」として大衆の目を惹かせる。果たして、本人はそれを好き好んでいるのだろうか。

シャルは、女として生きてきた自分が「男っぽくてカッコいい」

などと言われたら嫌だろうな、と目を細める。

きつと、無理やりにも「女」を心掛けるに違いない。あまり好まないミニスカートを履き、裸に見えてしまう程の露出の多い服も着て、眉に鋭いアーチを描き、ピカピカに光るイヤローブをして、頬にはチークカラーを唇には深紅色のリップグロスをこすりつけるように塗りたくり、それで男の腕に胸を押しつけて媚びだす。

「それでも、男っぱいって言えるの？」と口から裏声混じりの甘い声が出てくる。

恐らく自分ならば、そこまでやるだろう、と。

そんなことを考慮し始めると厄介で、足を覚束ない感じに組みながら乱暴な格好で座るケルンが、シャルには可哀想に見えてきてしまう。

悲哀の視線を向けている時、ちょうど赤と白のしま模様が入ったボールが飛んできた。シャルの頭に触激した。

ボールはそのまま白いベンチの後ろ側へぱんぽんと音を出しながら転がっていく。

シャルは鋭利な視線をベンチの前方へ送る。パルテノンたちが小さな足音を立てながらこちらへと駆けてくる。

隣のケルンがさつと立ち上がる。「よお」と右手を高く挙げる。そうしてから、急ぎ足に白色のベンチの後方へ行き、転がっているボールを取る。

「俺も入れてくれよお！」と叫びながら、パルテノンたちの群れへ駆けていった。

シャルはまたしても冷ややかな目をしていた。ケルンが身長メートル程の紫色の奇形生物と「バレーボールもどき」をしているのがベンチから見える。

人間の体型をしていながら紫色の肌、大きな青眼、トナカイのような鼻、裂けたかのように両端を鼻の高さまで吊り上がらせた口。「気持ちわりい」シャルが誰にも聞こえない声音で漏らした。

嘔吐しそうになった。声にならない声で「オエエツ」と口が大きい

く開いた。

「こんな世界、早く出たい」心の中が悲鳴を上げている。

そこでケルンが唐突に、シャルの方を向いてくる。ボールを隣のパルテノンに預ける。

「おい、お前もこっちに来い！」と呼号する。

「いえ、わたしは遠慮しとくわ」あんな気持ち悪い生物に近付くなどあり得ない。

シャルなりに大きな声で言ったのだが、ケルンの耳には届かなかったのか、こちらに駆けてくるのが見える。

「なあ、お前も気分転換にどうだ？」

「別に、今の気分で十分だから」シャルはぶつきらばうに返事する。
「そう突っぱねるなよ。お前、感じわりいな」ケルンが唇を尖らせる。

「感じ悪くて結構」

シャルが言った時だった。ケルンの右手がシャルの左腕を掴んだ。
「いいから、来いよ」

無理やりシャルの左腕を引っ張る。あまり男としての腕力を感じられなかった。

「何するのよ」と言いながらもシャルは仕方なしに付いていく。
パルテノンたちがボールを抱えながら待っている。シャルは見下ろす形となる。

「こいつも参加するってよ」

ケルンの言葉を理解しているようではなかったが、パルテノンたちは奇声のようなもので歓声を上げて小さく飛び跳ねる。

裂けた口は紫色の顔の半分ほどを占めている。小さな顔とは不釣り合いな牙が生えている。涙ぐみながら必死に吐き気を抑える。

早速ひとりのパルテノンが棒みたいな腕で赤白のしま模様のボールを空中へ放つ。

ボールはシャルの目前に落ちてくる。パルテノンの背丈を踏まえれば、かなり高く上げたのではないだろうか。

シャルは意地悪く、ボールを思いつき高くへ上げてやろうと考える。膝を曲げ、腰を落とす。バレーボールのアンダーハンドパスのように両腕をくっつけ、下からボールを捉える。

シャルは自分の力の全てを振り上げる両腕に込めた。ボールはゴム製で軽く、案の定ボールは青空に突き刺さろうとするかのようにまっすぐに飛んでいく。

ケルンやパルテノンたちのかけ声が消えている。シャルは、ボールが青空に溶けていく様をずっと見つめている。

どうよ。わたしはあんた達なんか嫌いなよ。心の中で勝ち誇った台詞を吐いていた。

どんな顔してるんだろ。わたしのこと嫌な女って思ったんだろうな、とシャルはケルンたちの顔を窺う。

ケルンの口が大きく広がっている。「すげえ」と声を出す。パルテノンたちも声を出しながら嬉しそうに飛び跳ねている。

「お前、スゴいな！」ケルンが声を弾ませる。

「え？」シャルはきょとんとしている。

「バレーでもやってたのか？」

「昔、ちよつとだけ」

「でも、あんなに高く上げる必要はねえだろ」とげらげら笑う。

シャルは気まづくなり、咳払いをする。ちよつとボールが落ちてくる。ケルンが小さく空中へ弾く。

パルテノンたちがボールをパスし合っているのを見守りながら、ケルンがシャルの隣に立つ。

「容姿や言語なんて、関係ないだろ？ あいつらは、単なる好奇心旺盛なガキんちよだぜ」

「うん」シャルは小さく頷く。

幼い頃に両親と公園で遊んだ時のことを思い出す。父親がボールを高く上げただけでやけに興奮している自分がいた。

今のパルテノンたちは、あの頃の自分とそっくりだ。容姿や言語以外は同じなのだ。

もう、パルテノンたちが奇形生物に見えることは無かった。

「俺さ、思っただけど」

ベンチで隣に座るケルンが言った。二人は休憩している最中で、パルテノンたちはまだボールで遊んでいる。

「『世界の壁』なんてあるけどさ、もっと厄介な壁があると思うんだよな」

ケルンがまたベンチに深く腰掛けながら、蒼天を見上げている。足もすっかりと組んでいる。

「もっと厄介な壁？」

「人種だとか容姿、宗教、身分、言語、性別、その他もろもろさ」

「どういう意味？」

「つまり、『目には見えない壁』こそが一番厄介だと思うんだ。そう簡単には越えられねえんだよ」

なるほどな、とシャルは納得する。ケルンの場合ならば、「男らしさ」に悩まされている。「性別の壁」はたまたこの場合は「容姿の壁」だろうか。

本人は越えたい。でも、越えられない。壁は想像以上に高い。

「世間の常識」という名の壁が隔ててしまった。

「俺たちが今いる世界ってのはさ、常識が無い世界なんだよな。ここには、『目には見えない壁』なんてものは皆無なんだ」

ケルンの顔は笑っているが、微かに哀愁が漂っている。

「あるのは、あからさまな『目に見える壁』だけさ」

シャルにも分かってきた。ケルンがこの世界を愛している理由が、自分たちの元いた世界こそが、壁だらけだったのではないか。パルテノンたちが穏やかに遊んでいるこの光景は、これこそが、平和そのものなのではないか。

どうりで、ケルンは呑気な態度でいられたわけだ。この世界から脱出する気など端から無かったのだから。

「明日も、ここで待ってるからな」

ケルンが唐突なことを口にする。シャルは急すぎて、呆然としながら目をしばたかせる。

「明日、お前の答えを教えてくださいよ」

「わたしの答え？」

「お前がこの世界に残るかどうか。脱出したいってんなら、俺も一緒にについてやってやるからよ」

シャルにはケルンの心理が読めない。

「どうして、そんなにわたしのことを心配してくれてるの？」

「まあ、同じ異世界の者同士だからな。なんだか、見捨てられないだろ？」

「本当に、それだけなの？」

「どういう意味だ？」

「シャルー！」

後方からピサの声が飛んできた。シャルたちの会話を中断させた。もう、あれからずっと探してたんだよ」

ピサは実に「心配していました」という表情を浮かべている。

「そうなの？ ごめんなさい」シャルは頭をぺこりと下げておく。

ピサはそれ以上を言わなかった。代わりに、傍らに座るケルンの方へ視線を移す。

「あ、ケルンだ。久しぶりだね」

「よお」と右手を挙げる。

「少しは泳ぐの速くなった？ また今度、勝負しようね。絶対負けないよ」

「おう」とだけケルンは応える。シャルには生返事を感じた。

「それじゃあ、シャル、そろそろ帰ろうよ」

「ええ、もう疲れたわ。さつさと部屋のベッドで休みたい気分」

ピサが先に歩き始める。シャルも真っ白いベンチから腰を上げる。ふとベンチ下に銀色の光を発見する。

「あ、それ俺の指輪だよ」

間延びした声を出しながら、ケルンのはんびりとした動作で指輪を拾い上げる。

「貰い物？」

「ああ」

「元いた世界の彼女？」

シャルは至つて冷静な表情を心掛けた。ケルンの艶めかしい唇の周りに大きな歪みが出る。

「違つて。だけど、すげえ大切な貰い物なんだ」

再び木造のアパートに戻ってきて、シャルがドアのレバーに手をかけた時だった。

「シャルちゃんじゃない」

鼓膜が破けてしまいそうな程のハスキーな声で呼び止められた。四十がらみの中年女性だった。メッシュの入った茶髪が肩まである。

ピンク色を基調とした派手な柄のジャケットを着ている。シャルには、お世辞にも似合っているとは思えなかった。中年女性には派手過ぎで、かと言って若者が着るような柄でもない。

要するに、良い歳をした中年女性がいつまでも若者の心を保とうと努力してはいるのだが、ファッションセンスや身体は若者でいてくれなかった。そんな印象を与える。

しかし、それからすぐにシャルは「この人、見覚えがある」と首を横に傾ける。

最近ではなく、自分がもっと子供の頃だったかも知れない。会ったことはあるのか。話したことはあるのか。それらは全く思い出せない。

「ピサ君、シャルちゃんが見つかって良かったわね」

「うん、疲れちゃったよ」ピサは軽快に返事をする。

「シャルちゃん、ピサ君はあなたを探して必死にみんなの所を回っ

てたのよ。ちゃんと感謝しなさいね」

中年女性が語気を強めて言うと、「そうそう」とピサが何度も首を縦に振る。

シャルの頭には、二人の言葉など届いていなかった。耳の穴へ入って、もう片方の耳の穴から風みたいに通り返けていった。

今は、この中年女性のことが気になって仕様が無い。

その抱懷は何か重要なことを示しているのではないか、と直感が告げていた。

それこそ、シャルがいるこの世界の謎を解き明かす何か。元からこの世界の住人たちそのものが謎解きの手掛かりだったが、その中でも特に重要な何かをこの中年女性が握っている気がしてならない。

「シャルちゃん、どうしたの？」

「シャル、また体調が悪くなった？」

ピサと中年女性が心配しているが、シャルは応えない。今は、多くの物たちが頭の中で複雑に絡まり合っている。処理が出来ない。容量オーバーだ。

アパートの入口の扉はどっしりと構えている。シャルはレバーにもたれかかるように手を載せる。

「ちよつとシャル、何がどうしたの！」

ピサが慌てふためいた声を出す、シャルは無言で振り向きもしない。

そのままピサと中年女性を無視して、アパートの扉の中へと消えていった。

小さな円形の部屋は依然として三原色で斜線模様が描かれている。凝視をしていると目が痛む。室内に日光を与えないカーテンを尻目に、シャルは一番奥にあるベッドに近寄る。

すぐにベッドへ潜り込んだ。間髪入れずに眠気が襲ってきた。戦う気など元より無く、呆気なく身を委ねた。

ここは夢の中だ、とシャルには直ちに分かった。

真つ暗闇な空間にシャルだけが突っ立っていた。足場は海面みたいに小さく波が出来ている。

身体が異様に軽く感じる。うつむいて自分の姿を確認してみる。服を全く着ていない。裸では無いが全身が白く透き通っている。

今ここにいる自分は魂なのかな、とシャルが思っている時だった。真つ黒い海からぶくぶくと気泡が発生する。

海と混ざり合ったような、液状の身体をしたケルンが浮き上がってくる。

「受け入れることが大事なんだ」ケルンの声が言ってくる。

「ええ、それは理解したわ」とシャルは応える。

それを聞き、ケルンの身体の所々が屋根から滴れる雨のようになつて、真つ黒い海に吸収されていく。

ケルンの体が泥のように崩れる。すると、今度は液体状の中年女性が浮かび上がってくる。これにはケルンの声では無く、シャルの声が当てられていた。

「あなたは、重要な鍵を手に行っているのよ」

喋っている顔は中年女性なのに、声は自分のもの。凄まじく違和感があり、心臓がロープか何かできつく縛られているようだった。

「あなたは、誰？　どこの世界の、いつのわたしが知っているの？」
中年女性は答えない。ただ、顔が少し歪みだす。元から年相応の

しわがあるのに、歪み始めると顔が若干若返っているように見える。この中年女性の、「自分が知っている頃の顔」が混ざり出しているのだとシャルは気付く。だが完全に変化はしてくれず、そのまま黒い海面に溶けていつてしまう。

また、ケルンが姿を見せる。

「この世界の方が元いた世界より全然良い所じゃんか。それでも、無理やり戻りてえのか？」

「……分らない」

「すっかりとした答えが出せないから保留ってか？ 冗談じゃねえ、俺はそんなに気長じゃないぞ」

「わたしは、どうすれば良いの？」シャルはついついケルンにすがってしまふ。

「知るか。お前が決めることだろ！」

「わ、わたし、わたし、は……」

シャルは下を向きながら、しどろもどろに言葉を探す。

「早く決めるよ、弱虫」

ケルンの言葉を聞いたシャルはすすり泣いていた。子供の頃の顔で涙や鼻水を垂れ流している。

ふと気が付けば、身体も子供の頃に帰っている。リボンを付け、前髪は一直線に揃っている。

あどけない顔のシャルが母親と父親の手を握り締め、三人で公園内を歩いている。辺りにもたくさんのお子連れがいる。サッカーで遊んでいる父と子や、レジャーシートを敷いて手作り弁当を食べている家族の姿がある。そんな中、シャルは父親とバレーボールをしている。ゴム製のボールは良く跳ねた。母親は少し離れたベンチに座っている。シャルが時々手を振ると向こうも手を振ってくれる。

そんな、幸せな風景。

瞬く間に風景が変わった。家の中だった。家族三人だった頃と違い、古臭い家内になっている。自分の体は先程よりも少し成長して

いる。

玄関のチャイムが鳴った。やつれた頬をした母親が帰宅した。父親が死んでからは母親が女手一つでシャルを養っている。仕事と家事を両立する母親は、疲労の蓄積が顕著に現れていた。

「シャルちゃん、よろしくね」

叔母の声だった。両親とも死に、叔母と叔父に養子として迎え入れられた時の風景に変わっていた。

自分の体もかなり成長している。格好や髪型もしっかりと思春期らしく意識し始めているのが分かる。

「シャルちゃんの母親のようににはなれないけど、精一杯頑張るからね」

叔母の覚悟の入った台詞。それからのシャルは叔母や叔父を受け入れられず、家族のように接することが出来なかった。

そんなある日だった。シャルの大事にしていたゴムボールが捨てられてしまった。大事に残しておいた、両親との思い出が詰まったゴムボールだった。

「どうして捨てたのよ」と泣き叫ぶシャル。

叔母は何度も謝ってきたがシャルはそれを許せず、家を飛び出した。

そして、シャルは海のほとりを歩いている。灯台の光と海道に設置された電灯だけが薄らと足元の砂浜を照らしている。

夜中だった所為か、辺りには人っ子一人いない。世界に自分一人だけしか存立していないような、そんな孤独感が襲う。

海気はひんやりとしている。シャルは空き缶などのごみに注意しながら砂浜に腰を下ろす。静寂の中で唯一の音を発している夜の海を眺めてみた。真っ黒い海上が大きな口を開け、うねり声を上げている。油断をすれば、すぐに飲み込まれてしまいそんな雰囲気漂っていた。

肌寒い海風が吹いた。シャルの髪を波のリズムに合わせて小刻みに靡かせた。

栗立つのと同時に、何故か温もりを感じた。

海は全ての生命の母親で、その胸に飛び込めば、例外なく我が子を優しく抱きしめてくれるのではないか。

そう考え始めると芋づる式に記憶が蘇ってきて、目頭に熱が溜まり始める。手招きする海の中に両親がいるような気さえしてきた。

シャルは砂浜から腰を上げる。スカートの尻に付いた砂をはたき落とさずに、そのまま海に向かってふらふらと足を運びだす。

波跡を越える時、最後のチャンスと言わんばかりの突風が吹いた。揺れる前髪が視界を悪くしたが、シャルは気にすることなく歩き続けた。

渚が目前にやってくる。生まれる前に戻るようで、身に纏っている全ての衣服を脱ぎ捨てた。

冬なのに、体の全てを撫でる風が温かく感じた。快楽を味わっている気分すらした。

「ママあ、パパあ」と幼かった頃のような声で呟きながら、水際の^{みぎわ}中に体を入れていく。

夢から覚めると、目尻から頬にかけて湾曲を描くように何かが伝っていた。頭で考えるよりも先に右手がそれを拭っていた。その数秒後になって漸く涙だったと気付く。

全身が汗だくになっており、寝間着が肌にべっとりと張りついている。

気持ち悪かったのでシャルは湿った寝間着をベッド横に脱ぎ捨てる。どうにもそれだけではすっきりしそも無かったので、シャルを浴びることにした。

シャルは浴室の扉を開けながら、海で自殺する直前にも服を脱ぎ捨てたことをぼんやりと思い起こす。

蛇口の水がなかなかお湯にならない。苛立ちを覚えつつ、吐息を

頻りに吐き出していた。

憂鬱が糸状となって、脳内で複雑に絡み合っている。自分の過去を思い出してしまったのもその一因だが、何より今の自分が何者なのか気がなくなって仕方がなかった

自分は死んだ筈なのに、生きている。何で助かったのか。それとも本当に死んでいて、ここは天国だったりするのだろうか？

しかしすぐにシャルは、こんな色彩感覚のおかしい天国つても嫌だな、と肩をすくめる。

とにかく、自分自身で元いた世界を放棄してしまったのにまた戻りたいと駄々をこねるのは、利己主義にも程があるのではないだろうか。

そもそも、あちらに戻った所で何か良いことがあるというのか。こちらの世界にいた方が幾分か幸せではないだろうか。

ふと、シャルの耳に何かが跳ねる音が侵入してきて思考を遮られた。既に湯気が浴室内を存分に包み込んでいた。手のひらには蛇口から流れ落ちる湯水の温もりがある。

ああ、お湯になるのを待ってたんだけ、と今更思い出す。室内に充滿するもやもやは、今のシャルの心が形となって現れているようだった。

今は考えれば考えるほど、頭がこんがらがってしまいそうだった。シャワーから飛び出てくる温もりを全身で受け止めながら、ただその気持ちよさのみに意識を向けた。

肌触りのよい川の本流が頭から首筋を流れ、肩の辺りからたくさんの支流となり全身へ広がっていく。そして、最終的には足元の浅瀬に混ざる。

汗と一緒に全ての深憂を連れ去ってくれればどれだけ幸せだろうか。シャルは小さく願った。

バスローブしか羽織っていないが、まだ体が火照っている。シャルは浴室付近にある冷蔵庫を覗いてみた。紫色のコップを使い、牛

乳を喉へ通した。

ベッドへ向かう時、星空のカーテンに目を配っていた。全く日光が入らないのだから、現在が何時なのかは分からない。

そこで、ふとシャルの頭の中にあの言葉がよぎった。

「もう、八時だよ」

おそらく昨朝、ピサがシャルを起こした時に言った台詞だ。

この世界に朝昼晩は無い。時計なども無く、時間帯という概念は存在していない。

なのに、ピサは『八時』と言った。毎朝一緒に食事をするのが習慣だと言っていたこともシャルには引かなかった。「毎朝」とは、何を定義して言っていたのか。いつも同じくらいの時刻に目が覚めるから、だろうか。朝昼晩が見た目で判断できない世界において、予期せぬ事態が訪れたとしたら、果たして修復は可能なのだろうか？まさか、機械のように体にタイマーがセットされていて、一秒たりとも計画が狂わないようにプログラミングされているわけでも無いだろう……。

「やっぱり、この世界ダメだ」

自然と言葉にしていた。シャルの内側で、ガラス玉のようなものが勢いよく弾けた。胸の鼓動がどんどん加速していく。

この世界には穏やかな幸せが溢れていて、元いた世界には苦痛しか残っていないのかも知れない。端から見る人間には、「馬鹿だな」と揶揄^{やゆ}されるかも知れない。

だが、この世界に馴染んでしまつたら、何かとても大事なものを失ってしまうのではないか。シャルにはそんな気がした。

この世界の真相は掴めなかったし、中年女性の正体も全然分からず仕舞いであった。しかし、シャルはそれでも良かった。どこから湧いてきた自信に満たされている。ケルンと共に、即刻この世界から脱出しよう。

仮に百歩譲って、ふたりは元の世界に戻れなかったとする。この狭い世界で一生を終えることとなり、いつの間にか何か大切なも

のが錆びていき、シャルの体から剥がれ落ちていくのかも知れない。それでもシャルは、後から「こんなことやらなければ良かった」などと後悔しないことを誓えた。

先程まで凍てついていた脈が、今は弾んでいるのが分かった。清々しさすらあった。

シャルはすぐに外出用の衣服を身に纏う。早く早く、と心臓の鼓動が急かす。

しかし、レバーに手をかけた所で動作が止まる。

ピサが起こしに来ないことからして、おそらく今は夜中なのだろう。いくら外が白昼の景観のままで、ケルンがこの時間にひとりで公園にいるとは考えにくかった。

だがそれでも、シャルはレバーを傾ける。

もしベンチにいなかったら、ずっとそこで待つてればいいんだ。

このまま睡眠に入ってしまったら、今のこの熱い気持ちがどこかに消えてしまう。

シャルが勢いよくドアを開ける。なだらかな階段が先に見える。

覚悟を帯びた力強い眼差しで、シャルは最初の一步を踏ん切った。

シャルが外出し、部屋の中は閑静に満ちていた。開かれた扉が、年代物らしい枯れた唸り声をさせながら、ゆつくりと元の位置に戻る。

すると、扉に電子掲示板のようなものが、無音で薄らと浮かび上がってくる。

大量の文字が、画面を覆い尽くした。

公園内は、白昼と何ら変わらない明るさを保っている。今は本当に夜中なのだろうか。シャルは不安になってくる。

昼間にあれだけはしゃいでいたパルテノンたちの姿が一切見当たらない。ピサや紳士、謎の中年女性、それどころか人っ子一人姿がない。

今現在が夜中だからなのだが、暗幕のかからない人工の青空や単色のオブジェクトの中にと、この世界にいる全ての生物が突如手品のようにぱっと消えてしまったのではないか、という錯覚に陥る。

自分が真夜中の海で自殺した時に似ているな。シャルはいつかも知れない過去を思い起こしながら、ぼんやりとした表情で足を運び続ける。

あの世界に自分だけしかない気分だった。いや、どちらかと言えば、自分があの世界から弾き出される形だったのかも知れない。

シャルが様々な思いを巡らしていると、約束を交わした真っ白なベンチに辿り着いていた。そこには、赤褐色のシヨートヘアをしたケルンの姿があった。足を組んで堂々と座っているが、やはり艶めかしい靈気を存分に放っている。

「よお」と細長い右手を挙げてくる。

シャルは顔には決して表さなかったが、思いもよらない事態に困惑していた。

「どうして、もういるの？」

ベンチに深く腰掛けたケルンが一笑する。紅潮した鼻の頭を恥ずかしそうに掻きながら言う。

「何となく、来る気がしたんだ」

ケルンのその言葉を聞き、シャルは破顔一笑する。頬がピンク色に染まっている。心を砕かせていた全ての要素が、完全に取り払わ

れた。

「わたしも、そんな気がしてたの」

世界の壁は相も変わらず、遠方に屹然きつぜんとそびえ立っている。やはり、不気味な靈気も霞むことなく健在だった。

だがシャルは昼間と全く違い、決然とした態度をしていた。今は、ケルンが傍らにいる。根拠など露ほどもないが、ケルンと一緒にならばどんな苦難も乗り越えられると、自信を持っていた。

緑色の芝生に引かれた、これが最後のチャンスだと言わんばかりの赤い境界線が見えてくる。相対した色で目に立つようになっていく。

「ここを踏み越えたら、どうなるか知ってるか？」

ケルンがふと立ち止まっては尋ねてきた。

「熊みたいな奇妙な生物に捕まって、奈落に落とされる」シャルは即答する。

「そうそう、あいつ厄介だよな。まともに戦っても勝てねえだろうし」

「でも、あいつを何とかしないと駄目よね？」

「ああ。駄目だろうな」ケルンが他人ごとのように頷く。

「何か秘策でもあるの？」

ケルンが真剣な眼差しを向けてくる。シャルは、ケルンの輝くように生気が漲った瞳にうつとりしながら、どんな奇策が出てくるのだろうか、と内心わくわくしていた。

「とにかく捕まるな。それしか言えねえ」

シャルは、とてもがっかりした。眉根が不細工に歪んだ。

「あの熊みtainな奴は捕まったらどう仕様もないけどな、動きはてんでのろまだ」

「それって無計画過ぎるわ。脱出なんて出来るわけない」

シャルが諦観の滲んだ台詞を吐くと、ケルンの顔が急に強張る。つい数十秒前、期待を寄せすぎると後悔すると学んだばかりだった

から、シャルは邪険な表情で構える。

「俺が罔になれば良いんだ」

「え？」堅い表情が解ほくされるのに差して時間は掛からなかった。シャルは鼻白む。

「俺が頑張つてあの化け物から逃げる。一秒でも長く引きつけるから、お前はその間に壁を登るんだ」

「でもそんなことをしたら、あなたが」

「お前が助かれば、それで良いんだ」

シャルは、ケルンの強靱な眼をしげしげと見つめることしか出来ない。

「それで、あの壁をどうやって登るかだけだな」と、ケルンは数十メートル先に佇む世界の壁を指差す。

「そうよ、あんな高さの壁をよじ登るなんて無理だわ。ねえ、やっぱり諦めましょう」

シャルは、ケルンが付いてこないのならいつそのことこの計画を中止にさせてしまおう、と企てていた。

ケルンが口の両端をにつと吊り上げる。シャルは悪寒がした。

「実は、全部が同じ高さじゃないんだ」

ああ、やっぱり。シャルの心の奥底で二つの感情がこんがらがる。それはどちらかと言えば、どす黒い現実がシャルを一生手放さない為に纏綿てんめんしてくるようでもあった。

「一箇所だけ背の低い所があるんだ」

ケルンは眼前の赤い境界線を越えないように、線に沿って歩き始める。壁で唯一背の低い箇所へ案内してくれるみたいだ。

もう心の内で結論を出していたが、シャルはケルンに従って後を付いていく。

確かに、壁には不自然なほど低くなった所があった。ケルンの言うとおりだった。

シャルは壁の天辺に視線を這わせる。真っ直ぐ横に続いていたの

に、突如深い凹が現れる。巨大な生物に壁の頂点を噛み砕かれてしまったようにも見える。

あれならば、わたしでも登れるかも知れないな、とシャルは思った。

凹んだ壁の先には他よりも多めに本物の青空が覗いている。瑠璃色の海や風浪に弄ばれる白い船を一隻確認することも出来た。間違はなく本物の海と空が、元いた世界が、ほんの数メートル先に存在している。

「あそこなら、何とかよじ登れそうだろ？」

ケルンは自慢げに胸を張る。自分は登れないというのに。

「……うん。多分大丈夫」

「そんなに暗い顔するな。お前は堂々と壁の先に行け」

罪悪感のあるシャルだったが、壁の先に待ち構える生気濃き景觀を目にしてしまうと、体中の脈が高まり始めていた。

しかしそれでも、ケルンを置いて自分だけ悠々と助かるのは……。シャルは葛藤する。

その時だった。

例の熊に似た生物がいつの間にか現れては、シャル達の方へ寄ってきていた。黒い体毛の中で銀眼がぎらぎらとこちらを睨んでいる。シャルは狼狽しながら傍らのケルンに視線を移す。ケルンはうろたえることなく化け物と睨み合っている。一切視線を外さない。

「赤い境界線越えてないのに、現れやがった」

シャルはぶるぶると身震いしながら、消え入りそうな声でケルンに相槌を打つ。シャルの視線は化け物でなく、ケルンだけに向けられている。

「何だか納得いかねえが、無理やりにも実行出来るから良かった。結果オーライだな」

ケルンがやんわりと微笑む。

駄目、それじゃあ嫌！ シャルは必死にかぶりを振る。ブラウンの髪がケルンの首筋をくすぐる。

しかしそれでも、ケルンは返事をしない。ただ一方的に喋る。

「いくら俺でも、そんなに長時間は引きつけていらねえ。速やかに壁を登ってくれよ」

「……嫌」

「多分、一分が限度だろうな。前に挑んだけど、あいつ、走ることも出来るんだぜ」

シャルは眉を八の字にして泣いていた。真っ赤な両頬には涙が伝い、光り輝いている。

ずっと化け物だけを見つめていたケルンだが、鼻水をすすする音が肩脇から聞こえてくると目を細める。

「俺はこの世界に残っても良いけど、お前は違うんだろ？ 早く行けよ」

突如、シャル達二人に大きな影が落ちてくる。黒い化け物が二足歩行で、シャル達のすぐ目の前に立っている。

「ほら、行けよ」

ケルンがやや乱暴に言う。シャルは、ケルンの華奢な腕を小さな手で掴んでは離さない。

黒い化け物は、腕を伸ばせばケルン達に触れられる所まで来ている。

「行けよ！」

「嫌！」

「行け！！」

ケルンは全力でシャルの腕を振り解く。その反動で、シャルは芝生に倒れ込んでしまう。

黒い化け物は眼前のケルンでなく、完全に無力化したシャルの方へ歩を進め始める。シャルは急いで立ち上がるうとするも、全身が震えてしまい力が入らない。

「やつ、やめてっ」シャルがうわずった声を出す。

それでも黒い化け物は、もったいをつけることなく、事務的な動作でシャルに歩み寄る。シャルは、その場から全く動けない。

黒くて太い腕がシャルに触れようとした時だった。ケルンが黒い化け物に渾身のタックルをした。しかし、黒い化け物はバランスを崩す所か微動だにさえしなかった。ただ、ケルンだけが弾き飛ばされる形となった。

黒い化け物の視線は、完全にケルンの方へ移る。ケルンはすぐに芝生から立ち上がり、元来た方向へと走り出す。地面を大いに揺らしながら、黒い化け物もその後を二足歩行で追う。

ひとりその場に残されたシャルは、瞳から溢れ出る涙を服の袖で拭う。次の瞬間には決然とした表情となり、世界の壁目掛けて全力で走り出す。

決してケルンの逃げた方向へ振り返らないようにした。届きはしないが、最大限の敬意だと思った。自分は、とにかく壁を越えなければならぬのだ。

遂に、シャルの手が壁に触れた。凹んだ所はシャルの背とほぼ同じ高さだった。

もう少しで戻れる。全身が脈打つ。青空が、瑠璃色の海が、腕を広げて出迎えてくれている。

壁に手を掛けた時、背後から大きな闇が覆い被さり、シャルの身体を持ち上げた。シャルには何がどうなっているのかさっぱり理解出来なかった。

視界には、シャルを捕らえんとやってきた『黒い化け物たちの群れ』があった。

シャルはただ呆けた表情のまま、奈落の底へと落ちていく。

「お前が助かれば、それで良いんだ、か。飛んだ茶番だったわね」

シャルはぶすつとした表情をする。ケルンはそんなシャルと目を合わせないように、申し訳なさそうにベンチの横で縮こまっている。

「まさか、複数いるとは思わなかった」ケルンは両手で頭を抱える。奈落に落とされ、シャルの意識は瞬く間に遠ざかった。目を覚ますと、公園の芝にケルンと仲良く伏していた。前回、黒い化け物に捕まった時と同じシチュエーションだ。

「全てを返してよ」

「全てって？」

「全ては全てよ。わたしに抱かせた感情の全て」

「感情？」

「もう、どうでも良いわ」そう言い残し、シャルはベンチから次第に離れていく。

ケルンが慌てて追いかけてくる。しりえからシャルの肩に手を載せるも、すぐに弾かれてしまう。

そのままシャルが先頭を、ケルンが後尾を歩く形となる。ねずみ色の舗道にピサの姿を発見したのは、それから数分後だった。

「朝食を食べる為にわたしの部屋へ行ったのに、肝心なわたしがいなくて焦ったでしょ？」

シャルの第一声にしょげてしまったのか、ピサはうつむいたまま何も言わない。

また恩着せがましい言葉が飛び出すんだろうなと考えていたシャルは、逆にその重いしじまにたじろいでしまう。それはケルンも例外ではなかった。

公園内を生暖かい風が吹き抜けていく。それと同時にピサが視線を上げる。シャル達を空虚な瞳で見つめながら、弱々しい声で言う。「シャル達は、この世界から脱出したいんだね？」

「ええ。わたし達は、この世界からどうしても脱出したいの。わたし達、よ」

シャルは強調するように、わたし達、を更にもう一度言う。ピサを始めケルンも別段その意味を問い詰めることはなかった。

「ねえ、シャル」そこでピサは言い淀む。

シャルは、その次に出てくるのは「絶対に壁の向こうに行っちゃダメだよ」だと思っていた。やれやれと鼻息を鳴らしながら、眉間にしわを寄せる。

もう煩わしいから、土下座で「絶対行くな」とピサに懇願されても、けんもほろろに断らなきゃ、と胸の内に決めておいた。

だから、「僕の頼みを聞いてくれたら、脱出する方法を教えるよ」などとピサに言われ、しばし開いた口が塞がらなかった。

紳士の部屋はとても大きくて洒落ていた。床はフローリングになっており、どこからか湿り気の多いジャズの演奏が流れてきてはすうと耳に入ってくる。

玄関の時点で数点の絵画が飾られており、リビングに行けば更に数が増していく。山の後方から朝日が登る絵が一番のお気に入りらしく、誇張するようにソファアの正面の壁に掛けられている。ガラステーブルの上には中身が飲み干されたワイングラスが置かれている。

お気に入りのジャズが静かに部屋を包む中で、自分はソファアに腰を深く沈ませる。お気に入りのワインをじっくりと味わいながら喉に通し、お気に入りの絵画をまったりと鑑賞する。それが人生で一番の楽しみだと紳士は言う。

大理石のはめられたダイニングルームには透明なガラスケースがあり、これ見よがしに沢山のワインが並んでいる。

シャルは、この紳士の見栄っ張りな部屋にうんざりとしていた。とても居心地が悪く、何よりピサの頼み事が気になって仕様がなかった。

「どうですか。なかなか立派なものでしょう?」グラスにワインを注ぎながら、紳士は堂々たる風采で笑う。

「ああ、立派だな」気だるそうにケルンが応える。

「それはそうと」

「分かってるよ」シャルが言い終わる前にピサがこっくりと頷く。

「じゃあ、早く頼み事つてのを聞かせてよ」

「頼み事の話なんだけどね。と言うか、頼み事とは言ったものの、実は僕も頼まれてる方だったんだ」

「あなた、何を言ってるの?」

「私がピサ君にお使いをさせたのですよ」紳士が真面目な表情で言った。

「じゃあ、わたし達に用事があるのは、あなたの方だったの?」紳士が顎を引く。「あなた達のが気になって仕方なかったのです」

シャルの後方からため息がした。振り返ると、ケルンが苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「胡散臭いな」

肯定する動作こそしなかったが、シャルも同感だった。あまりにも都合がよすぎる。

「私のことを疑っておられますね?」

これにはシャルが応える。「つい昨日、わたしの記憶を否定した人だし」

「勿論、私は自分の考えが正しいと思っていますよ」そこで紳士が伊達のステッキをくるくると回す。

「しかし、あなた達が外界に出たいと言うのなら、最大限それを尊重したい」

シャルはいまいち納得のいかない節があったが、ケルンが首を縦に振るのでそれについては納得しておくことにした。

「それで、わたし達にどうしろと?」

「何故外界へ出たいのか。その訳を聞かせて頂きたいのです」

どんな無理難題が飛び出してくるのかと構えていたシャルには、拍子抜けな質問だった。ケルンに脱出の主旨を伝える時の為に、既に考えを纏めていた。

「どんなに想定外な出来事があっても、それがそこに実在しているのならそれは現実で、否定するのではなく、受け入れないといけない」

その発言にケルンは片眉を吊り上げる。自分が主張したことを、否定的だったシャルがなぞっている。シャルの発言の真理を見抜こうと凝視する。

「確かに、受け入れることが大切かも知れない。みんながそういうことを出来ないから、いつまで経っても『壁』が無くならないのかも知れない。でも……」

そこでシャルは言葉を嚥下する。ピサも紳士もケルンも、その場にいる全ての人間が、固唾を飲んでシャルの言葉を待つ。

「でも、自分のことだけは、絶対に信じないといけない。どんなに現実だと言われても、受け入れちゃいけない。そうしないと、自分が自分で無くなるから！」

シャルの主張が終わり、気詰まりな沈黙が室内を満たした。当のシャルですら話の継ぎ穂を失って当惑する。そんな中で紳士は眉をひそめて言う。

「確かに、自分以外の存在に託せるほど安価なものではありませんね。万一にもそれを手放してしまったら、取り返しがつかなくなってしまう。後から己の持ち物だと主張するのはよろしくない。真理を追究しようなど、野暮な行為でした」

シャルさん、すみません。紳士は被っていたシルクハットを取り、丁寧にぺこりと頭を下げる。無言で不本意そうな顔をしていたが、ピサも頷く。

それを確認すると、シャルはおもむろに振り返る。紳士やピサの反応など正直どうでも良かった。ただ、現在のケルンの表情だけが重要だった。

ケルンは照れくさそうに頭を掻いていた。その仕草は女性が手櫛で髪を解かすようで、非常に強烈な色気を撒いていた。

「立派だと思うぜ。壁をひとつ越えたな」

「ええ。後は、本物の壁だけね」

「それでさ」ピサの快活な声が、和む二人の間に割って入ってくる。「外界に行く方法だけ……」

「ああ、ゴアも納得してくれたんだし、さっさと教えてくれよ」

ケルンは急かすように顎をしゃくる。ピサは、奥歯に物が挟まったかのような苦い表情で紳士と相槌を打ち合う。

「何やってるんだよ。早くあの熊みたいな奴をどうにかする方法を教えてくれよ」

「あの熊はどうにも出来ないんだ。世界の壁を越えようとする者を必ず阻止するよ。確率なんか最初から無くて、絶対に、だよ」

「まさか、最初から外界に行く方法なんて無かったってこと？」

シャルの眼球には赤い感情が浮かび上がっている。「つまり、わたし達を騙したのね？」

「騙してなどいませんよ」紳士が冷静な口調でシャルを制止しようとする。

「白々しい！ よくも無駄な手間暇掛けさせたわね！ あなた達は、わたしの覚悟を弄んでいたわけね！！」

シャルは全ての鬱憤をその怒声に込めた。ダイニングルームによく響き渡り、ワインを飾ったガラス戸が少しばかり振動した。

ピサが、まるで微震でも起きているかのように足をびくびくと振るわせ、言葉に出す。

「外界に出る方法は、壁を乗り越える以外にもあるんだ」

「どんな方法よ」

「下から外に出れば良いんだよ」

シャルはケルンの顔を窺う。自分と同じように目を白黒とさせているのを確認し、ピサに視線を戻す。

「それは、地下ってこと？」

「ええ」これには紳士が答えた。「今から私が案内致します」

「え、ええ」シャルの返事に力は籠もっていない。

今まで散々外界への道を摘んできた熊の化け物。退けるなんて選択肢が無いことは最初から分かっていた。

しかしそれにしても、地下から外界へ出るというのはあまりにも気拔けな答えではないだろうか。

紳士とケルンは、既に玄関へと歩き始めていた。シャルは半ば放心状態で突っ立っている。

ケルンがそれに気付き、踵を返す。遠慮なくシャルの肩にぽんと手を置くが、先程のように不躰に弾かれることは無かった。

ケルンは、シャルの不安を取り除こうと優しく微笑む。

「二人とも脱出できるんだ。良かったじゃないか。結果オーライさ」ケルンの優しさが、その言葉に包容されていた。シャルは深く頷くも、表情はまだ堅いままだった。

まだ気を引き締めてなければと分かっているけど、心の奥底に安心し始めている自分がいた。とても恐ろしいことだと思った。

それは断じて弱さなどではない。強さなのだ。そう信じたかった。でも、踏ん切りがつかない。

大丈夫。そんな言葉をケルンに囁かれたら、無理やりにも歩を進めるしかなかった。ケルンの小さな背中を追うように、シャルも紳士の部屋を後にする。

紳士の部屋には、無言で立ち続けるピサの姿だけが残されていた。口を閉じ、目は虚ろ。ただ、その場に棒のように立っているだけだった。

それが突然、自分を支える力を失って、勢いよく床に倒れ込んでしまう。

ぷつりと糸の切れてしまったマリオネットのように、腕や足、首など全ての関節をグニャグニャに曲げている。ピサは呻き声のひとつも上げない。ただ、フローリングの床に貼り付くように伏してい

る。

日の出を描いた絵画が額ごとひとりでに裏返り、電光掲示が現れる。沢山の文字が、無音でゆっくりと浮かび上がってくる。

床に伏した少年が立ち上がることは、なかった。

寸分の狂いも無さそうな程の綺麗なキューブ形の通路が伸びている。埃だらけの鉄壁には一定の間隔で平行に木枠が埋め込まれており、そこにカンテラが引つ掛けてある。

深淵に誘導するように薄明かりが奥へ奥へと続いている。誘蛾灯ゆうがとうを彷彿させる。

礼儀正しき紳士に案内された地下は、秘密の通路としては見事な演出が施されている。幼児の落書きした地上とは、雲泥の差だ。

本来こちらの方が普通である筈なのに、十二色の景観に身を置いていた所為で、シャルは感覚がおかしくなっていた。普通が普通ではなくなっていたのだ。

初めから警戒心を解くなどという事はしなかったが、シャルは過剰なほどの懷疑を抱くはめとなる。

「まさに隠し通路って感じだな」ポケットに両手をねじ込みながらケルンが言う。

「しばらく使っておりませんでしたからね。ほら、壁に埃が溜まっているでしょう」

そう言つて紳士は人差し指で壁に一文字を描き、指先に貼り付いてきた埃をシャルたちに見せつける。ケルンは感心するように指先を見るが、シャルは一切そちらへ視線を向けなかった。

シャルは、未だにこれが紳士の畏ではないかと用心している。だが、端から彼を信用するなどという選択肢が自分の中に無いのを分かっただけだ。

シャルは、葛藤の渦の中でひたすらもがき続けている。這い出るには、この世界から抜け出す他ない。

「大丈夫か？」ケルンがシャルの顔を伺っている。うん、とシャルは返した。

ケルンはまだ晴れない顔をしている。「じゃあさ、笑ってみてく

れよ」

「どういうこと？」

「もうすぐこの世界から脱出できるんだぜ。自然と笑みが漏れてくるもんだろ」

シャルは顔を歪ませる。「あなただつて笑つてないわ」

「もらい泣きみたいなもんで、お前のふくれっ面が移つたんだ」ケルンは軽く舌を出し、子供のようにいたずらな顔をする。

「そう言えば、『お前』じゃなくて『シャル』よ」

シャルは、真剣な眼差しでケルンの目だけを捉える。彼にはしっかりと名前と呼んで欲しかった。

ケルンは照れくさそうにポケットから出した右手で鼻の頭を掻き、急に何かを諦めたように口元を弛緩させる。

「悪い、シャル」

「良いのよ、ケルン」

ケルンが真顔で言う。「シャル」

「ケルン」

茶番じみた掛け合いが終わり、二人の間にしじまが流れ込んでくる。紳士も含め、皆がその場に立ち止まっている。古びた通路に灯された光は、もがくように天井へと揺らめいている。

ふと、二人が噴き出す。互いがほぼ同時に異口同音で言った。

「変な感じ」

シャルは右手で口を覆いながらすすくと、ケルンは大きく口を開いて豪快に笑った。紳士は居心地悪そうな顔もせず、ただ二人をじつと見つめ続ける。

「そう言えば、元の世界にシャルそっくりな女がいたんだ」ケルンが目を輝かせた。

「わたしにそっくり？」

「一見気が強いんだけど、本当は凄いい甘えんぼだった。でもそんな所が可愛かった」

ケルンにはやにや意地悪そうにシャルを見る。シャルは何と返答

して良いか困り、鼻白んで顔を背ける。ケルンの顔を直視できる自信がない。ケルンの思惑通りだとは分かっているが、どうしても首が動かない。

つい、言葉に棘を生やしてしまう。「それって指輪の彼女のことでしょ？　こんな所でそういう話をするなんて、わたしを馬鹿にしてるの？　非常識にも程があるわ」

ケルンは目を白黒させる。「彼女じゃないって言ってるだろ」

「いいえ、彼女に違いはないわ。その女の話始めた時のケルンの目、すごく輝いてた。あれは友達を越えた特別な感情を抱いてる目よ」

ケルンは呆れた顔をし、両腕を組む。埃だらけの壁に遠慮なく寄りかかる。カンテラの光がケルンの体をオレンジ色に染める。彼の厳しい表情にオレンジ色が合わさり、妙な迫力を演出する。

ケルンはポケットから銀色の指輪を取り出す。親指と人差し指で掴み、様々な角度に変えてみせる。

「妹の指輪なんだ」

「え、妹さんの？」

「ああ。左の人差し指にファッションとしてよくはめてたんだ」

ケルンは人差し指でリングを弾く。指輪と爪が衝突し、小さく鈍い音がした。空中で何度も回転した指輪はやがて重力に抵抗出来なくなり、ケルンの手のひらにぱとりと落下した。指輪を強く握り締め、ケルンはしんみりと話した。

「この世界に来る前から数えて一年半くらい前、直腸癌に殺された」
どつと重い空気がシャルの胸に流れ込んできた。通路の先に広がる闇は歪み、シャルを飲み込もうと手招きしてる。

妹には結婚まで視野に入れてた男がいてさ、そいつに誕生日プレゼントとして貰ったんだと。あまりに嬉しかったようでさ、料理中や入浴中でも肌身離さずつとはめてたんだぜ。

そんな幸せの中、突然直腸癌が発覚しちまった。残念ながら、早期発見とはいかなかった。生存確率はゼロではないが、非常に危険

な状態だと言われた。

男は、すぐに失踪した。

本当に信じてた人間に裏切られた。人生の絶頂からいきなり地の底まで落とされるってのは、どんな気分なんだろうな。その凄まじい落胆は、躁鬱そううつに繋がってたのかな。

妹は、手術をすれば助かったかも知れない。でも、受けなかった。海に身を投げた。

ケルンの話を聞き、シャルは自分も海に身を委ねた事を思い出した。海にはやはり、危ない魔力が宿ってるのだろうか。

そして、ケルンの持つ指輪の意味も理解し、彼に謝った。

紳士は長く伸ばした口髭を指で引つ張り、目を細めながら二人の事を黙って観ていた。壁に張り付けられた橙色の中には、紳士の影が静かに佇んでいた。

しばらく通路を進むと、両端に整然と並んでいたカンテラが絶えた。それでもなお狭い通路は続いており、シャル達の足元には卑しさを帯びた影が忍び寄ってきている。

既に、自分たちは誘蛾灯の罠に誘い込まれてしまった蛾なのではないか。シャルの胸の鼓動が小さく加速してくる。

紳士は漆黒のスーツの胸ポケットから金色のジッポーを取り出し、ケルンに手渡す。「私が案内できるのは、ここまでです」

「どういうことよ」シャルが間髪入れずに尋ねる。「何でこんな所で案内が終わりなのよ」

「それが決まりだからです」

「決まり？」ケルンも尋ねる。

「ここから先は、外界に出たい者だけしか足を踏み入れてはならない決まりなのです。何故なら、この先へ行けば、もう後戻りはできなくなるから」

紳士の真顔の発言にシャルとケルンは言葉を返せない。唾を飲み

込む。喉が膨らみ、ドクンと音をさせた。

後戻りはできないなどという事は元から覚悟していた。しかし、このように改めて言われると、心の奥底に重石を吊された気分になる。

「後戻りができなくなるって、あの熊の時みたいに公園に放置してもらえないってこと？」

シャルが問うと、紳士は無言のまま首を枝垂れる。「はい。もうこちら側の世界に帰ってくることはありません。外界への脱出が成功しても、失敗しても」

「それはつまり、排除されるってことか？ 脱出しようなんて人間は、殺してしまえってことなのか？」

紳士は、ケルンの問にはしばらく反応しなかったが、少ししてから顎を引いた。

「その可能性は大いにあるでしょう。脱出を試みた方々がこちらに戻ってきたことは、一度たりともないのですから。しかし、それが真実だという根拠は全くございません。なぜなら、私はこの先に行ったことがないのですから。つまり実のところ、今まで脱出を試みた方々が成功したのか失敗したのかすら把握できてない。それを知る術はないのです」

「ピサとか、わたしがアパートの前で会ったあの人も？」シャルが訊く。

「ええ、ピサさんやソフィアさんも。その他の方々も含め、今こちら側の世界に住む人間は誰ひとりとして脱出を試みたことがありません」

シャルが目をぱちくりと瞬かせた。何か疑問符が浮かんだ顔だった。しかし、数秒後には満足そうな顔に変化した。

「それじゃあ、そろそろ行くことにしましょう」シャルが背後のケルンに向き直って言う。

「もう良いのか？」

「ええ、もう十分よ。こんな気だるい話を聞くより、さっさと光り

輝く未来の方へ歩き出したいわ。それともケルンは、まだこんな紳士に未練があったりするの？」

ケルンは紳士の顔を全く見ずに答える。「いいや、俺ももう十分だ。満腹だ」

「それじゃあ、行きましょう？」

ケルンは釈然としない様子のまま頷く。そのまま二人は、紳士と別れの挨拶を交わさないばかりか、彼の顔を一度も見やらないで歩を進め始めた。

二人を包むライターの灯りが暗闇の中へ潜っていくのを確認し、紳士は辛そうにため息を漏らした。

それから一分ほど物思いに耽^{ふけ}るように目を瞑り続けた。それからすぐに、こおろぎに似た無機質な機械音が紳士の体の中で鳴った。急かすように慌ただしい間隔で鳴り続ける。

ジッポーが入っていたのとは逆のスーツのポケットから、丸い小型の通信機を取り出す。赤いボタンが円形の真ん中にひとつあるだけのシンプルな通信機だ。

ずっと鳴り続けていた機械音は、紳士が赤いボタンを押した瞬間、途絶えた。代わりに、籠もった男声がした。

「どう？」

紳士は右手で口髭をさすりながら「順調ですよ」と答える。くぐもり声の通信相手は、すぐ様「そうか、いよいよだね」と言った。

紳士は通信機の先の相手には穏やかな話し方をしていたが、顔つきは険しくなっていた。声だけでコミュニケーションを取る相手が、それを知る由はない。

暗闇の海の中に、小さくて頼りない灯りがひとつ揺らめいている。その中には二人の男女がおり、閑静とした通路に足音を響かせていた。

数メートル先すら暗闇に沈んでおり、ライターの灯りで照らしても壁の模様すらはつきりとは視認できない。顔を近付けて凝視すると、ようやく見える程の漆黒の闇だ。

現に、ライターを持つケルンは壁に二回肘をぶつけている。そんな彼の後方を歩くシャルに至っては、思いつきり瘦躯を衝突させたのが三回、肩と膝を二回、肘や手を一回、計九回壁にぶつかっている。

もしも灯りが無ければ、二人はお互いの顔を見ることすらままならなくなり、不安に支配されたシャルは、いよいよ発狂してしまっただかも知れない。

今の二人には、この気弱なライターの灯りだけが頼りとなっている。

ふとシャルが足を止める。前方のケルンはそれに気付かず、どんどんシャルから離れていく。

「ねえ」シャルが呼び止めると、弱々しい灯りがこちらに引き返してきた。「シャル、どうしたんだ？」

「わたし達、やっぱり誘蛾灯に誘い込まれみたい」

「え？」シャルの発言を理解してないケルンは、素っ頓狂な声を出した。「誘蛾灯？」

「わたし達がこの隠し通路を使う……、いえ、きつと外界へ脱出すること自体、筋書き通りだったんだわ」

シャルは、苦虫を噛み潰したように唇と眉根を歪める。ケルンには、もう少しでシャルの目から涙が溢れ出てくるように思えた。一先ずシャルの両肩に手を添えるが、すぐに弾かれてしまう。

「ごめんなさい。ありがとう」シャルの眉毛がだらしなく萎れる。
「何か大きな存在があるの。わたし達は、その上で踊らされてるだけなの」

「大きな存在？」

「人為的で大きな存在よ。どれほどの大きさは分からないけど、紳士が何かしら絡んでるはず」

「ゴアが？」ケルンが目をしばしばさせる。すぐに「ピサとかも？」と付け足す。

「ピサは分からない。でも、紳士は絶対よ」

ケルンが表情を堅くする。シャルの目を見つめながら、鼻息を小さく立てる。「どういうことだよ」

「わたし、紳士にちよつとした罨を張ったの」

「罨？」

「今絵本の世界にいる人間は、誰も脱出を試みたことがないって話になった時よ。わたしが『ピサとか、わたしがアパートの前で会ったあの人も？』と言ったの覚えてる？」

ケルンは釈然としない表情のまま、ゆっくりと首を縦に振る。「ああ、確かそんなこと言ってたかもな。でも、それがどうしたってんだ？」

「わたしのその質問に対して、紳士はこう言ったわ。『ピサさんやソフィアさんもずっとこの世界にいる』って。ソフィアさんって言ったのよ」

ケルンの表情が歪む。「それがどうしたんだ？ ソフィアって、あの背が高くて派手な服着たキイキイ声のおばさんだろ？」

「ええ、多分ね」

「多分？」

「わたしはアパートの入り口で一回きりしか会ってないの。その時は名前も聞かなかったけど。だから、紳士の言葉からあの人がソフィアさんだろうって判断したわけ」

「なるほどな。だけど、それがどうしたってんだ？」

「わたしがアパートでソフィアさんに会ったことをあの紳士が知っているはずがないの。紳士とは既にパルテノンのいる公園で別れているんだから」

「確かにな」ケルンがゆったりとした語調で言う。そして片眉を吊り上げる。「じゃあ、どうしてゴアはそのことを知ってたんだ？」

「ピサやソフィアさんから聞いた可能性が高いけど」

「じゃあ、それだろ」

「それにしたって、把握し過ぎよ。不自然なほどに。よく考えてみて。この世界での『夕方』に例の公園でわたしとあなたがベンチに座っていて、そこにピサと紳士がわたしを捜してやってきた。あなたと紳士に別れを告げて、わたしとピサはアパートに帰った」

ケルンは段々疲れが溜まり始めたのか、億劫そうに頷くだけだった。そのまま二人はまた歩き始める。

「それでアパートの前でソフィアさんに会った。でもその時のわたしはとても精神的疲労が激しかったから、彼女やピサを無視してひとりでアパートに入った。自室に辿り着くまでの間、ピサやソフィアさんがわたしを追い掛けてきた雰囲気はなかった。だからアパートの入口以降、わたしはピサやソフィアさんの動向を知らない。でも、彼らにとってもその時間帯は『夕方』だった。いえ、もう夜に近かった筈。ピサがわたしを起こしてきた時に『朝』と発言してるし、彼らにとっても『夜』は寝て、『朝』は起きるということになっている。わたし達と同じ習慣。だとしたら、ピサがソフィアさんのどちらかは夜だというのに、その出来事をわざわざ紳士に報告しに行っていることになるの」

ケルンが右手で柔らかな髪をこしこしと掻いた。呆れ顔だった所為で女つ気が少し霞んでいたが、それでも女性であるシャルの頬を紅潮させるだけの効力はあった。

「俺たちを紳士の家に連れていこうと、ピサが公園に来ただろ？　と言うことは、ピサはアパートの件よりも後に、ゴアに会ってる。夜だろうがゴアとピサが会った事実が存在してる」

「でも、ピサが公園に来たのは夜中か早朝よ。わたしの部屋を覗いてから来たとしても、やっぱり紳士と会ったのは夜遅くから早朝の間。それに用事を頼んだのは紳士よ。通常なら紳士がピサの家に行くか、自宅にピサを呼ぶかする筈。だとしたら、あの礼儀正しい紳士が夜中に人の家を訪問するか或いは呼び寄せるなんて、やっぱり不自然よ」

ケルンはまだ何かを言いたげな表情をしていたが、両手を挙げ、ため息を大袈裟に漏らす。お手上げです、という意味のようだった。「まあ何にしる、シャルが言っていることが正しいと仮定する。^ま纏めると、この世界にいる奴らは皆して俺らを監視し続け、ほんの些細な出来事があるだけでも紳士に報告を入れてる。そういうことか？」シャルの目元に力が入る。「ええ、そういうこと。紳士が司令塔かは分からないけど。とにかく、あの落書きの世界の住人は、みんなグルよ」

そこでケルンが足の運びを止める。今まで同じ尺を保ってたケルンの背中が大きくなるのを察知し、シャルもすぐに止まる。

ランプで照らされたそこには、大きな鉄製の扉が佇んでいた。ケルンがゆっくりと灯りを近付ける。扉の表面に張り付いた埃を左手でささつと弾く。そこには旧約聖書の時代において、神への捧げ物とされていた羊の顔が彫られていた。

ケルンはそのまま数秒間動きを止めた後、肩をすくめた。そしてシャルの方にゆっくりと振り返り、苦笑する。

「どうもシャルの説が正しかったようだ。俺らに、『自ら誘蛾灯に飛び込んでこい』って言ってるみたいだぜ。たちが悪いな」

シャルは言葉を発せず、顎を引くだけした。ケルンがまたため息を吐く。

「シャル、どうする？ まだ後戻りできるぞ。それでも誘蛾灯に突入するのか？」

シャルは心外だというように鼻息を漏らす。「出会った時からずっと何度も言ってるじゃない。わたしは元の世界に戻る。戻りたい

んじゃない、戻るのよ」

ケルンにはやにやと笑いだす。「そりゃあそうだな。シャルが引き返すなんてあり得ないか。シャルのそういうところ、嫌いじゃないな」

「どうもありがとう」シャルが鼻高そうに笑う。

そうして二人は蝶番を片方ずつ持ち、羊のドアを思いつきり開け放った。

扉の先は行き止まりだった。

扉を開いた瞬間、僅か三メートル程前に壁があったのだ。左右にも平行な壁があり、面積九ヘイホームメートルくらいの正方形の空間がそこにあるようだ。

ここまでの道中暗がりが多かったとは言え、抜け道なんてものは一切なかった。そんなものがあれば絶対に気付くほど通路は狭かった。つまり、この正方形の空間は行き止まりではなく、『通過すべき正式な地点』なのだ。

「シャル、ここで待つてろ。俺が調べてくる」ケルンが先行してその正方形の空間に足を踏み込む。

別にこれほど小さい空間なら扉の前からでも調べられるのにとシャルは思ったが、ケルンの行動は早かった。真っ暗闇な箱の中で灯りが所狭しと走り回る。

シャルは不安から左手を胸に当てて見ていた。もしかしたらこれは開閉が自由な獣の口で、いきなりケルンが食べられてしまうかも知れない。

しかし、シャルがそうやって胸のうちをざわざわさせているのは裏腹に、ケルンはいくばをこさえながら箱から出てきた。「来てみるよ」

シャルはケルンに付いて箱の中に慎重な足取りで入る。箱の中は特に何かがある訳でもないように思えたが、入口側に振り返ると脇にボタンが一つあった。

ボタンは埃が付着してはいたが、その下にはカビや傷がほとんど

ないことから比較的新しい物だと判った。ボタンには「閉」という文字が刻んである。この正方形の箱はエレベーターなのかも知れない。

もしエレベーターだとしたら、他に「開」や階数のボタンがある筈なのだが、これには「閉」のボタンしかない。畏の臭いがぷんぷんするが、シャルには「閉」のボタンを押すしか現状打破する方法はなかった。

案の定、入口が鉄の扉で塞がれた。そのまま箱がエレベーターのように上昇し始める。それからしばらく、網目模様の扉の隙間からは下降していく闇だけが覗いていた。

シャルとケルンは言葉を一切交わさない。シャルにはまだケルンに話していないことがあった。ソフィアに見覚えがあることだ。これはシャル自身にも全く答が出せそうになかった。話したらケルンを混乱させるだけだと思い、胸のうちに閉じ込めておくことにした。しかし、これが何かとても重要なことに繋がっている気がしてならなかった。

エレベーターの動きが止まった。網目の隙間には「部屋」があった。沢山の書棚にはびっしりと本が詰めてあり、中央の小さな丸型テーブルには灯の点つてない新品らしきろうそくが二つと書類の束が載っている。

どうやらこの部屋は書斎のようだ。あまりにも生活感が埃のように所々に残っており、今でも誰か人が住んでいそうだ。

紳士やピサたちを調べ、自分たちを弄んでいる黒幕張本人の部屋なのだろうか？

「この部屋でのんびりとくつろぎながら高みの見物をしているのかもな。良いご身分なことだ」ケルンが舌打ちをする。

果たしてここが本当に黒幕の部屋なのだろうか。それにしたって、エレベーターでここに繋がる意味が分からない。黒幕が高みの見物をするような人間ならば、それは臆病者であり、あくまで自分たちとの接触だけは避けたい筈だ。

それなのに、この部屋は一直線に辿り着いてしまう。自分たちがこの部屋に来ることはやはり相手側にすれば、規格内なのだろうとシャルは思った。

だが何にしろ、先ずは目の前にある書斎らしき部屋を色々と探索してみる必要がある。自分たちの現状がどれ程不利なのかはそれから考えればいい。

それなのに、本来開く筈のエレベーターの扉がずっと沈黙を続けている。

「やけに長く閉まってないか？」ケルンが訊いてくる。シャルは頷く。

ケルンが試しに「閉」のボタンを押してみる。何も反応がない。長く押してみても変わらなかった。

その時、書斎の奥の扉が女の呻き声のようなけたたましい音を立

てて開いた。シャルとケルンの目線がそこに向かう。

黒い塊がずつしりとした足取りで書斎に入ってきた。シャル達はすぐに例の「熊みたいな生物」だと気付いた。

それと同時に、冷徹なエレベーターの扉がきりきりと悲鳴を上げながら開いた。先程扉が閉まった時は全くこんな音などしなかった。「畜生、試合のゴングってことかよ！」ケルンが怒鳴り声を上げる。しかし、それは銀眼の生物の威嚇する声に掻き消されてしまった。書斎全体がバイクのエンジンみたいな音が支配している。

「わたし達を捕まえて、またあの公園に戻すつもりかしら」
「だったらまだ良いんだけどな」

二メートル程の黒い塊が二足歩行で書斎の本棚の隙間を進んでくる。世にも不気味な光景だった。

公園に現れた奇形生物と同じ姿形をしているが、中身は全くの別物だ。あちらは「侵入者を穴に落とす」という明確な理由を持って事務的な態度をしていた。まるでロボットのようだった。

しかしこちらは、餌を目の前にした獣の眼をしている。

シャル達は一先ずエレベーターから出るが、次の行動が閃かず困惑した。部屋の中は一般的な書斎の一点五倍くらいの広さはあるが、書棚以外に物が殆どなく、逃げ道がない。

黒い獣がよだれを床に撒き散らしながら立ち止まっている。シャル達の動きをしつかりと生氣漲る銀眼で追っている。来るぞ。

ケルンが声を発した瞬間、シャルの視界の中の黒い体躯が、何倍にも膨れ上がった。

シャルが己の身に降り懸かった出来事に気付いた時には、もう彼女の瘦躯は散らばる本の上に転がっていた。

目の前にある、腐朽し始めた木製の天井の上を赤い飛沫のような物が通り過ぎた。それと同時に、シャルの頬に生暖かい感触が付着した。

シャルは自分の頬を腕で擦る。白い腕の中にペンキを垂らしたよ

うに赤い模様が加わっていた。シャルはすぐにその体勢のまま辺りに目線を走らせる。

すぐ間近に大きな本棚が二つ、お互いを支え合う形で傾いている。中身は全て飛び出し、本棚の真下に山を作っている。シャルは山の中に人影が潜んでいるのを発見した。瞬く間にそれがケルンだと分かった。

シャルが叫びそうになったのと同時に、別の本棚が中身があるにも関わらず勢いよく倒れた。書斎に地震のような大きな振動と音がした。

本棚が元あった所には、黒い化け物の姿が佇んでいた。どうやらシャル達の姿を見失ったようだった。

シャルは慌ててケルンの埋もれている本の山の方へ転がっていく。ちようど本棚の影になっていて見つかりにくいだろう場所だ。

「シャル、俺が物音を立てて奴を引きつけるから、その間に本棚の影を通して脱出するんだ」本の山に埋まったケルンが小声で言った。必死に腕を伸ばし、黒い生物がやってきた入口の方を指差している。「何言ってるの、二人で脱出するのよ。ケルンを残していける筈ない」シャルも囁くように言う。

「俺はこの通り、素早く動ける状態じゃない。この本の山から脱出するだけでも音を立てちまうから、奴に気付かれる。もう、俺は足手まといでしかないんだ。な、だからお前だけでも助かれ」

シャルは声が出そうなのを必死に抑えた。だが、瞼が熱くなるのを我慢出来なくなり、目から涙が溢れ出た。

シャルの顎から滴った涙がケルンの血だらけの腕の上で跳ねて散った。本の隙間から覗くケルンは、苦痛に顔を歪ませながらも、口の端をにつと吊り上げる。

「何度も言ってるだろ。お前が助かれば、それで良いんだよ。それだけが重要なんだ。他のプラスはおまけでしかない。どうやらおまけを付けれる余裕はなかった、それだけさ」

書斎全体にまた鳴き声が響いた。地の底から届いたような迫力だ。

シャルは涙や鼻水を拭うことができないまま震え上がってしまう。

熊型の奇形生物はその声を最後に、のっそりとした足取りで書斎を後にした。凶暴な口から落ちた生臭いよだれが、奇形生物の軌跡を床に残していった。

本棚の影からそれを確認したシャルはふと安堵から、その場に崩れてしまう。相変わらず涙や鼻水をだらしなく垂らしながら、ケルンの方に向き直る。

「お前が助かれば、それで良いんだよ、か。飛んだ茶番だったわね」シャルは声を詰まらせながらも屈託のない笑みを浮かべた。
「結果オーライさ」ケルンも笑った。

その後、シャルの助けによりケルンは本の山からの脱出に成功した。シャルはケルンが全身から相当量の出血をしていると予想していたが、案外右の二の腕を怪我するだけに止まった。

とは言え、二の腕からの出血は激しく、止血する必要があった。

シャルは急いで書斎の中を探索し始める。

机の引き出しを片っ端から開けていき、カッターナイフを発見した。それを使ってカーペットの一部を切り取り、ケルンの傷口に巻きつける。カーペットの切れ端に赤色が染みていった。

今度はケルンも加わって、二人での書斎の探索が始まった。先の熊みたいな化け物が戻ってくる可能性があったが、何の対抗策もなしにこのまま進むよりは幾らかの情報を入手する方が有意義だという結論に至った。

書棚にある本や卓上の書類、黒い化け物の所為で床に散らばった書物にも目を通していく。いつあの熊がふらっと戻ってくるかも知れないので、ひとつひとつを書見している余裕はない。シャル達は本に関しては目次に目を通す程度にした。

机の上の書類をばらばらとめくっていたケルンの手が止まる。「おいシャル、これを見てみる」

シャルは持っていた辞典ほどのぶ厚い本を棚に戻し、ケルンのい

る机の方へ移る。ふと書類の束を握るケルンの右手に視線がいく。そこには真っ赤に染まった布が巻きつけられていて痛々しい。

「ほら、これだ」ケルンの綺麗なままの左手が一枚の書類を指し示した。

そこには絵本みたいな世界の大まかな地図がクレヨンで書かれていた。例の世界の壁の配置もしっかりと記載されている。

そして、紙面の上の端には大きな文字で『壁の庭』と書いてある。「壁の庭」シャルとケルンは同時にその言葉を口にする。

しかし、その単語が何か自分たちの現状の助けになるかと言えば、全くそれはないので無視することにした。それよりも、この世界の地図に何か素晴らしい手掛かりはないかと念入りに調べたが、結局何も得られなかった。

今現在自分たちがいる地下の地図があれば、これ程役に立つものはないだろう。シャル達は再び書を漁り始める。

シャルは本棚の片隅に丸まっている萎れたファッション雑誌を見つけた。表紙を飾るモデルに覚えはなかったが、服装からして相当昔の雑誌だと推測できた。

雑誌の背表紙の所を調べてみる。色褪せていて更には染みだらけで読み取り難かったが、どうにか製造された年を確認できた。案の定、シャルが幼い頃の物だった。

これだけ堅固な部屋でこの雑誌だけが浮いている。この雑誌から有力な情報を得られるとは思わなかったが、シャルは中を開いてみる。

何ヶ所かはページとページが古くなったインクによって貼り付いていた。丁寧に剥がそうとしても破けてしまう箇所や、剥がせてももうインクがぐちゃぐちゃに滲んでしまっただけで読めない箇所もあった。雑誌の中でポーズを決めながら全ての歯を見せるよう笑うモデルたちは、皆同じにしか見えなかった。彼女たちの目元には何かが滲んでいた。

そうしてパラパラとページを捲り、シャルの手が雑誌の巻末の辺

りまで近付いた時、ケルンが雑誌の上に手を載せた。「サボってないで手伝ってくれよ」

シャルの眉間にしわができる。「真面目にやってるから」シャルはそのまま雑誌を床に放り投げた。

結局、書斎から有力な情報は出てこなかった。二人は酷く落胆し、頼りないカッターだけを持って書斎を出る。部屋の外は廃墟の屋敷のように大きくて暗い廊下が左右に伸びていた。窓は全く付いていないようだった。ジッポーの灯りを走らせてみるも、廊下の端までは到達しなかった。

シャルたちは左右どちらに進もうか悩む。熊みたいな生物がこの辺りを徘徊している可能性が高いので、早く選択しなければならず、二人は焦燥感に駆られた。そんな時に僅かに左手から物音がしたので、二人は音を立てないように右の廊下を駆け始める。

十秒ぐらい経つと、走っているにも関わらず、背後から雄叫びだけが迫ってきた。化け物が走ってくる音はしないので、振り返りはしなかった。

雄叫びが一切聞こえなくなった頃には、シャルたちはどれだけ廊下を進んだか分からなくなっていた。廊下は主不在の書斎から出たときから何ら変化を見せていない。

自分たちの選択は果たして、正しかったのだろうか。シャルたちには分からなかった。ただ一つ言えるのは、左を選んでいれば、身を隠すなど不可能な場所であの化け物に遭遇していたという事実だけだ。

息をはあはあと弾ませながら、ケルンがいきり立ったように言った。「こんな殺伐とした廊下にずっといたら、いつあの熊に出会しか知れねえ。どこでもいいから、早く入れる部屋を探すぞ!」

その部屋が、熊との遭遇よりもっと酷い部屋だったら、どうするの? これ以上の混乱を避けるため、シャルは言いたくなるのを必死に堪えて走り続けた。

何の目的があつて延々と延びていたかは分からなかったが、いよいよ質素な廊下に変化が現れた。廊下は途絶え、地下の隠し通路と同様の小さなエレベーターが待ち構えていたのだった。

ケルンは何の警戒もなしに颯爽とエレベーターに乗り込む。シャルは躊躇つてボックスの前で立ち止まる。

「このエレベーター、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫なのかどうかって問題じゃないだろ。俺らにはもう、このエレベーターに乗るという選択肢しか残されていないんだ。だったらここで屁理屈なんかをこねてないで、さっさと選択しちまうべきだろ？」

ケルンに説得され、シャルもエレベーターに入り込む。前回のエレベーターは「閉」しかボタンが存在しなかったが、今回のエレベーターには「上」と「下」のボタンがついている。「閉」のボタンはない。

「どっちを押せば良いんだ？」ケルンの指は、「上」のボタンの上に置かれたまま止まっている。

「どっちも当たりだとかハズレだとかだったりしてね」

「シャル、悪い冗談はよせよ」

二人が混乱していると突如、エレベーター内に雑音混じりな掠れた男声が響いた。

「シャ……さん、……ルンさん、聞こ……すか？」

その声の主は、あの紳士だった。シャルとケルンはこの状況に、当然懷疑を抱いた。

「ええ、聞こえてるわ。どうしてあなたがわたし達の場所を把握しているのか、あまりにも怪しすぎて呆れてるところよ」

「それ……すね、私があなたた……味方……らですよ。あな……ちを助けたいのです。私を怪しい………てるでしょうけど、信じて

ほしいのです」

そんなことを言われようが、シャルが信じるわけがなかった。「余程の馬鹿じゃなきゃ、あなたを信じる人間なんているわけがないでしょ。まずは、あなたがどこからどうやって連絡をとっているのか教えてもらいたいわ」

「そ……言えません。話せば長く……ますし。なによ……の命も掛かった盛大な賭けで……信を行つてい……で」

「じゃあ駄目だな。お前の話なんて全て却下だ」ケルンが冷たく言い放つ。

「信じてもら……いのは十分に理解し……ます。それでも、例えば……があなたがたの耳か……に風のように通り抜け……としても、これだけは言わせて下さい」

エレベーターで『上』に行つて下さい。

紳士の言葉にシャル達は自然と口を紡いでしまふ。そんな都合の良いことがあるもんか、ならば『下』に行つてやろう。そう思うのと同時に、それこそが、この胡散臭い紳士の狙いではないかという疑念が込み上げてきた。

紳士はどちらに行かせようとして、『上』と言つたのだろうか。シャル達は困り果ててしまふ。

そんな時、廊下の暗闇の中から、あの化け物の雄叫びがした。その吠え声はまるで地響きのようで、シャル達の乗るエレベーター内をグラグラと揺らした。

シャルの体も連動してぶるぶると震え上がる。「ケルン、やばいわ。早くエレベーターの行き先を決めない」と

ケルンの指がボタンの上で震える。「言われなくても、そんなことは分かつてる！ 今、必死に考えてるんだ。お前は黙つてろっ！」

追い詰められてついつい出てしまったそのいきり立った声が、鋭利な刃となつて、シャルの中の何かを断ち切ってしまった。「ケルン、『上』よ！」

「え？」

「何でもいいから、『上』を押しなさいッ!」

戸惑うケルンを押し退けて、シャルはエレベーターの『上』ボタンを躊躇なく、拳で勢いよく叩く。シャルの意志を反映したようにエレベーターがぐらぐらと揺れた後、扉がすかさず閉まった。

暗闇の空間から姿を現した例の化け物が、どんだんに落ちていき、そして壁の中に消えた。

あれから紳士との通信は完全に途絶えた。シャル達はただただエレベーターがどこかに到達し、その運命の口を開くのを待つしかなかった。

「どうして『上』を選んだんだ？」ケルンは腕を組みながら、エレベーターの壁に背を預けている。

その質問に対し、シャルはただひたすら沈黙を貫いた。ケルンを説得する術など持ち合わせていなかったのだ。

胡散臭さ過ぎる紳士の発言に従ったのは、正直言えば、自棄^{やけ}からだった。このまま脱出に成功したとしても、もうそれでは駄目だと思ったのだ。

二人には、一生壊せない壁が付きまとうのが分かってしまったのだ。それはもう、物理的にどうにかなる代物ではないのだ。二人が出逢った、あの公園の頃に戻らない限りは。

運命の時が訪れた。エレベーターから吐き出されたシャル達は、眼前に堂々と構える灰色の階段を無言で上っていく。

コツ、コツ、コツ。静閑としたほの暗い空間には、シャル達の靴の音だけが響いている。シャルは先頭をせかせかと歩くケルンの指に嵌められたリングをずっと見つめている。

そして、一つの扉が二人の前に飛び込んできた。最初のエレベーター同様、悪魔の生贄を象徴する羊が彫られた、何とも挑発的でおぞましい扉だった。

ケルンは立ち止まって後方のシャルを窺う。開き直っていたシャルは一切の躊躇いもなく、蝶番に手を掛ける。

「おい、シャル」ケルンが慌てて声を出すも、シャルの手は既に扉を全開にしていた。

「今更こんなところで、躊躇していてどうするのよ」

扉の先には集会所のような広いスペースがあった。しかしながら壁は、シャルのいた部屋と同じように赤青黄の三色で埋められ、ドーム型の天井には油絵の具でプラネタリウムが描いてある。発想がパルテノン達のいた十二色の世界にそっくりだ。

二人は集会所の中をそぞろ歩きした。混じり合った靴音が天井まで響き渡った。

そしてシャルは入口以外の扉がないことに気付く。ケルンが不安そうに眉間を歪ませ、ゆっくりと言った。「ここが、俺らの終着点なのか？」

シャルはうつむいたままで、ケルンに表情を見せない。ただ一つ、垂れ下がる髪の間隙から覗く唇は、歪な形を作っていた。

それを見たケルンがシャルに近寄ろうとした時だった。

「いいや、ここは君達の終着点にして、出発点だよ」

シャルとケルンは同時に声の発せられた方を向いた。入ってきた

扉のところには、十代の金髪の少年と、その両脇に一人ずつ黒服の男が立っていた。

黒服の男たちは全く隙のない、ぴんとした立ち方をしていた。だが釘のように地面に打ち付けられているのではなく、バネが押さえつけられて縮こまったようにそこに構えているのだ。何か不測の事態が起きたとしても、すぐに対処ができそうだった。

そんな男たちに護衛された美麗な金髪を持つ少年は、彼らとは真逆で隙だらけだった。何の危機感も抱く必要のない状況にいるという、余裕の現れのようなのだ。その所為か、世間知らずな子供が持つ、ある独特な稚気を纏っている。

「何だお前ら」ケルンは威風堂々と声を出した。しかしそれは、大した覇気が感じられないものだった。

金髪の少年はそんな張りぼての脅しなど一切気にしてないようで、平然と話を始めた。

「君たち、よく頑張ったね。予想していた以上の記録で驚いてるよ、正直。タイムは最高記録だった前回は四時間も上回ってる。いやあ、素晴らしい素晴らしい」

記録？ タイム？ 前回？

シャルの頭の中に、聞き覚えがありながらも全く意味の把握できない言葉たちが響き渡る。自然とそれらを小声で反芻していた。

何かがおかしかった。身体に正体不明な違和感が侵入してきていた。自分のものである筈の身体が、まるで誰かの所有物であるかのように、奥深くに刻み込まれていた未知の何かが疼きだしていた。

その現象はケルンにも起きていたらしく、彼も立ち尽くしていた。二人は少年の言葉をただ聞くしかなかった。

「君らの歩んできた全ては虚構だったんだよ。勿論、君らはその曖昧な記憶で十二分に満たされていた訳だから、君らにとってはそれが人生の全てだったんだろうけど。でも周りは皆、それを知っていた。知らないのは当事者の君らだけだった。何とも残酷な結果だね」

金髪の少年が言っていることの意味が分からない。

「お前らが、俺らの人生の何を知ってるって言うんだよ」ケルンが禁忌を破った。

ははは。金髪の少年が不気味なほど白くて小さい顔にいとけない笑いを浮かべた。

「だから言ってるじゃん。君らの人生を一番知らないのは、君ら自身なんだって。だって、僕らによって作られた人生なんだから」

僕らによって作られた人生？ この不吉な言葉の意味が理解できない。

シャルはあまりにも幼稚な少年に問い質したかったが、その先が怖くてできなかった。禁園に足を踏み入れてしまう気がした。

あの絵本の世界から脱出する際には既に、もう後戻りはできないと己の胸に深く覚悟を刻んだ筈なのに、今シャルは戻ってこれないその先の世界に恐くしている。何もかもを越えたと思っていたのに、まだ大きな壁が立ち塞がっていたのだ。

「ところで、ソフィアに見覚えがあつたんじゃないかい？」

シャルは無言のまま、小さく顎を引いた。金切り声を発する中年女性の姿が頭に浮かんだ。

「でも、どこで会ったのか思い出せなかったよね？」

どうしてそれを知っているのか。金髪の少年の言うことを肯定するのは気が引けたが、その答を知りたいシャルは頷くしかなかった。「これだよ」と言つて少年は、手に握つた雑誌を掲げた。それは、あの熊の怪物と遭遇した書齋でシャルが見つけた、年代物のファッション雑誌だった。どうしてそれが出てきたのかシャルには分からなかった。

「これこれ」少年が雑誌の巻末ページを両手で広げてみせた。そこには「今月の星座占い」と大きな見出しがあつた。

その見出しのすぐ下にソフィアが、占い師として写っていた。

シャルの頭の中に、両親と過ごした日々の記憶が怒涛の勢いで蘇ってきた。そこでのシャルはまだ十歳ほどだった。

当時、世間を一世風靡していた占い師にシャルは嵌^{はま}っていた。彼

女が赤いハンカチがラッキーアイテムだと書けば、シャルは赤いハンカチを持ち歩いた。彼女が今日はあまり外出しない方が吉だと書けば、シャルは外出を控えた。

まるで洗脳されたように、シャルは占い師の言うことに従っていた。それがおかしいなんて思ったことはなく、また、それを至極当然に思っていた。シャルにとってそれは、「日常の一部」だった。

何とも言い知れない過去の感覚が、嵐のように高速で、シャルの頭の中を去っていった。後にはどう仕様もない不快感だけが取り残された。

金髪の少年はその一部始終をさも楽しげに見ていた。

「やつと思ひ出した？ そう、あの世界で会ったソフィアは、君の記憶の中に登場する人物だったのさ」

幼稚な少年は得意になつて話を続ける。「でもソフィアは麻薬所持で逮捕され、君はすぐに彼女を見限った」

「どうしてあんなに、そんなことまで知ってるの？ ここに来てからの記憶ならともかく、どうしてわたしとわたしの家族しか知らないことまで」

「だからさ、君と君の家族にどんな思い出があるかってのを、僕が思いついたように書いたんだって。ねえ、そうだよな？」

少年が後ろに振り向いて言った。すると、そちら側から一人の女性の姿が現れた。見覚えのある、背の高い中年女性だった。

「はい」とソフィアが頷いた。

「『わたしも是非、絡ませて下さい』と言ってみたら、即了解を頂けるなんて……。本当に感謝しております」ソフィアが深く頭を下げた。

「いやいや、そんなに畏まらなくて良いのに」そうは言いながらも少年は何でもなさそうな顔で応えた。人に頭を下げられるのに慣れている風だった。

「とにかく、君らは見事ここまで辿り着いた訳だから、ゲームは終了だよ」

「ゲームが終了？」とケルンが訊く。

「そう、ゲームオーバーさ。終わったゲームは、また最初からやり直さなきゃいけない」

また最初から？ シャルはその言葉の意味が理解できない。もう何もかもが分からない。

「そろそろ十分だろ？」と少年は億劫そうな顔で言った。「君らに説明するの、もう八回目だよ？ 毎回毎回、丁寧に説明するのは面倒臭いんだ。どうせ次回も初めから訊いてくるんだから、少しくらい端折らせてよ」

どちらから合図した訳でもなく、シャルとケルンは同時に来た道を走り出した。三色で描かれた模様の広がる部屋を脱出し、薄暗い廊下を走り抜ける。二人のドタバタとした足音が狭い廊下に響き渡る。

二人は廊下に立ち並ぶ部屋の中を視界の端に捉えながら、ひたすら走った。背後を確認できるだけの余力は残っていなかった。ただ、廊下に響き渡る足音は、明らかに二つ以上あった。

「多分ここだ！」シャルよりも数歩前にいたケルンが躊躇いなく、とある部屋に突入した。それが本当に自分たちがいた部屋か確認は持てなかったが、シャルも急いで中に入る。

部屋の中は例の書斎だった。多くの本棚が聳え立ち、幾つかは倒れて本を大量に吐き出していた。書斎の奥には例のエレベーターがあった。ケルンから順に滑り込む。

シャルが完全に入ったのを確認し、ケルンは『閉』と書かれたボタンを拳固で叩いた。扉がゆっくりと閉まる。早く早くとシャル達は焦れつたと思う。鉄の扉によって完全な密室になると、エレベーターは上に向かって動き始めた。

二人はぐったりと壁に寄りかかる。正方形の小さな空間に、二人のはあはあという過度の呼吸音が響き渡る。

額から大量の汗を流しながら、ケルンがシャルの顔を見た。それに気付き、シャルもケルンの顔を見る。艶やかな少年の顔は、宙に

視線を泳がせている。二人は一切の言葉を交わさない。

少ししてから、ケルンはポケットから例の銀色の指輪を取り出した。シャルがぼうつとその動作を見つめていると、ケルンが指輪を差し出してきた。

「これ、シャルが付けていてくれ」

「それ、ケルンの妹さんの大事な指輪なんですよ？」

「ああ、つくられた記憶の中の、つくられた妹の指輪だ。もう必要ない」

「なんでそれをわたしに渡すの？」

「元の持ち主がどうであろうと、今は俺の指輪だ。俺だと思って受け取ってくれ」

こんな時に何の冗談だとシャルは思ったが、ケルンの顔は投げやりな雰囲気など微塵もなく、真剣そのものだった。

「記憶は失われても、それがわたし達を繋いでいるって訳ね。男らしさを目指しているのに、随分とロマンチストじゃない」

シャルは無理やり嫌みったらしい顔を作ったが、ケルンは相互を大きく崩し、気持ちいい程の笑い声を出した。こんな状況なのに、とても嬉しそうだった。

「安心した」とケルンはニヤリとしながら言った。「相変わらず刺々しい性格なようで」

「なんだが不気味。何が言いたいだよ」

「今までの人生が嘘だったって、俺の記憶の中にあるもの全てが否定された。でも、それは違う。あの糞ガキはとんだ嘘つきだぜ」

ケルンの言わんとしていることを察知したシャルだが、敢えて訊いた。「何が違ったて言うの？」

「シャルは、俺の記憶の中のシャルと寸分違わないってことさ。シャルは俺の人生の証明なんだ。誰にも否定することできない、俺の本物の人生なんだよ」

真摯な顔でケルンは見つめてくる。シャルも目を逸らさずに、しっかりとケルンの綺麗な瞳だけを見つめる。そして、シャルはくす

りと笑った。

「ケルンも、新たに一つの壁を越えたよ。凄く格好いい」

端整なケルンの顔が紅潮する。照れ臭そうに鼻の頭をこすりはじめ、苦笑いとも照れ笑いともつかない笑いを漏らす。

「ありがとう。シャルに出逢えて、本当によかった」

そう言うのと、ケルンの華奢な体がシャルの体を包み込んだ。シャルは一瞬何が起きたか分からなくて頭を混乱させたが、体の方が先に理解していた。力がすつと抜け、あるがままにケルンに全てを託していた。

狭い箱は未だに上昇を続けており、どこにも辿り着いていなかった。シャルとケルンだけの時間に、水を差さないようにしているかのようなだった。

ゆったりとした時間が過ぎ、ケルンはシャルの体を解放した。すると今度は、シャルの方から唇を重ね合わせた。しかしこれは、ものの数秒で終わった。

「奴らは何度も俺とシャルが脱出を試みてるって言った。でもここに来るまでは、俺らの意思疎通が必須な筈だ。二人の遭遇を仕組むことはできても、二人の心を繋げることは奴らにはできない。俺らは本当の意味で繋がってるんだ。つまりさ、俺らは記憶を失っても何度でも挑める」

シャルは唇を窄めながら、目に淡い輝きを浮かべる。「違う、今回で最後にする。このまま二人で、自由になるの」

どちらから合図するでもなく、二人は同時に相手の唇に己の唇を重ねた。それはたくさんの誓いを含んでいた。

エレベーターが停止した。二人はエレベーターのドアに向かって構えた。相手は得体の知れない輩だ。拳銃を所持してる可能性がある連中に対して、素手で立ち向かおうとすることがどれほど愚かかは分かっていたが、今のシャル達にはそれしか術がなかった。

ドアが静かに開いた。ケルンが我先にと飛び出していった。シャルもケルンの背中にくっついて飛び出す。

だが、すぐにケルンの背中では停止し、シャルの進路を邪魔する壁となった。勢い余ってシャルは壁に激突したが、弱々しい壁は崩れることなく、彼女を受け止めた。

シャルは慌てて右にずれ、前方を確認した。そこには例の紳士が、拳銃を構え静かに立っていた。

シャル達が飛び出した場所は、前方へ細長く伸びた、天井も壁も真っ白な廊下だった。紳士の後ろには体格のいい男たちが四人横に整列しており、通り抜ける隙間が一切なかった。

シャルは瞬間的に本能で察した。これはもう逃げられない。

『いやあ、残念だったね』

紳士のところから、あの少年の声が籠もって聞こえてきた。恐らく紳士のタキシードにスピーカーが装着されているのだろう。

『君らは言わば裸の王様さ。金将も銀将も飛車も角行も……、駒が全てが奪われてる状況から対戦をスタートしてるんだから、勝てる訳がないだろう？』

シャルはこっそりとケルンの様子を窺う。彼は唇を噛み締め、眉根に深いしわを刻み、明らかに激しい憤怒を浮かび上がらせていた。まだ諦めていない人間の顔だ。

『僕のところからでは君らの姿は見えても、表情までは確認できなくてね……。もっと多めにカメラを設置しとくべきだったよ。でもわざわざ確認するまでもないかもね。どうせ君らは、悔しそうな顔をしてるんだろうからさ』

ケルンの顔を見てまだ希望を捨てきつてなかったシャルは、その言葉を聞いて思った。この連中のブレインの視覚がしっかりと機能していない今、何か抵抗をできないだろうか。

しかし目の前には紳士たちがいる。ブレインの目が節穴でも、彼らは何ひとつ動作を見逃さないだろう。結局、何も術は残されていないのだろう。

そうしてシャルの瞳に諦観が滲み出したのとほぼ同時に、紳士の視線に変化が訪れた。シャルはそれを見逃さなかった。

紳士がシャルの左手を見た。シャルはとつさに、左手への目線をケルンの背で遮った。

特に理由などなく、ただ二人の大事な絆を裂かれなくての行動だった。どうせこんなものなど、スタート地点では元通りにされてしまうとは分かっていたが、どうしても自ら可能性を放棄することだけはしたくなかった。

『ゴア、今シャルが左手を動かしたように僕の方からは見えただけど、何かしたのかい？』

無情にも籠もった声は、シャル達の僅かな希望を即座に切り裂きに来た。紳士は眉と目をひそめ、悠然と答えた。

「いえ、彼女らは何も怪しい行動などしておりません」

何もしていない？ シャルは紳士の発言にたまげた。紳士は確かに、自分の左手薬指にされた指輪を見ていた筈なのに、何故そんな嘘の報告をしたのだろうか。指輪など報告する必要もないことだと判断したのだろうか。

紳士の口元に注目してシャルは気付いた。紳士が声を出さずに口だけを動かしている。自分たちだけに何かを伝えようとしている。

大丈夫、指輪のことは言いません。紳士の口がそう動いた。

口に出せないのは当然、頭を縦に振って頷くこともできないので、シャルは目だけで合図を送った。

今回はあなた達の負けですが、次回は絶対に脱出できる筈。私が協力します。

それはとどのつまり、紳士はあの少年を裏切るということか。シャル達にはもうそれしか脱出する手だてが残されていなかった。シャルとケルンは目線だけで頷いた。

ありがとう、と紳士の口は動いた。私を信じてくれてありがとう。『ゴア、そろそろ撃ち込め！』

残酷な声が狭苦しい廊下に響いた。ゴアの背後に構えていた連中が皆揃って、シャル達に銃口を向けた。

シャルはすぐさまケルンに飛びついた。ケルンも同時に、シャル

を抱きしめた。二人は抱き合いながら、体を震わせた。

「シャル」とケルンは呟き、シャルは「ケルン」と呟いた。「愛してる」と二人は声を揃えて言った。その声は二人だけにしか聞こえていなかった。

そして、紳士の銃が銃声を二つ発した。シャルとケルンはその場に倒れ込んだ。二人はぴくりとも動かなくなった。

『ゴア、終わったかい？』スピーカー越しの声が尋ねる。

「はい、二人とも一発で仕留めました」紳士は淡々と答えた。

『それじゃあ、いつも通り、記憶の調整はお前に任せよう』

「畏まりました」

ゴアが視線を送ると、黒服の男たちはゴアを通り過ぎ、動かなくなったシャルとケルンを四人掛かりで運び出しはじめた。

『彼らは全ての壁を越えたつもりだったんだろうね。でも“運命”という壁だけは、どう足掻いても越えられないんだ。愉快だねえ』

紳士はうつむいたまま何も返事をせず、無言でいた。

『あ、そう言えば』と少年は言った。『このゲームの名前、やっぱり“英雄の庭”でも良いと思うんだけどなあ』

「『えーゆーの庭』ではネーミングセンスが最悪です。やはりここは、『壁の庭』のままで良いかと」

『うーん』と少年は唸った。『まあ、良いかあ』

エピローグ

もう八時だよ。

その第一声と共に、掛け布団が勢いよくはぎ取られた。少女は温かい感触を手放したくなく、無意識のうちにしがみついていた。

「ほらシャル、起きなよ」

はきはきとした若さ溢れる男の声だった。まだ眠気の方が勝っており、シャルは目を瞑っている。

どこからか漂ってくる香ばしいパンの匂いを嗅ぎながら、重たい瞼を徐々に開いていく。すぐに金髪の少年が映った。

顎が少し角張っていて頬に小さなニキビが沢山あるが、笑顔が可愛かった。シャルと同じ十八歳くらいの顔だ。

「もう、シャルったらお寝坊さんだね」

無垢な微笑みを浮かべながら、少年が言う。シャルの眠気を吹き飛ばす程に快活な発声だった。

シャルはゆっくりと上半身を起こ上がらせる。右手で、ブラウンの髪越しに頭を触れた。まだ、だるさが残っている。

「どう？ 良い夢は見れた？ ほら、早くこっちにおいでよ」

シャルが何も言わないうちに少年は、近くにある白い正方形のテーブルに着く。

シャルは額を押さえて、ぼうつとしながら辺りを見渡す。小さな部屋で円筒形になっていた。壁は赤青黄と、三原色でひたすら斜線の模様が描かれている。

窓らしき所は、全てにカーテンが閉めてある。外からの光を寸分も侵入させない真っ黒な生地に、無数の黄色い星が描かれている。

「ねえ、どうしたの？ まだ眠い？ 朝食、先に食べちゃってるからね」

少年は両手を合わせ、それから食事を始めた。オレンジ色のフォークで、水色の皿に載ったウインナーを突き刺す。

シャルは左手で目をこすり始めるが、そのまま左手の動作を停止させた。

「ねえ、どうしたの？」少年が心配そうに尋ねてくる。しかしシャルは、少年に対して一切の返事をしなければ、視線をそちらに向けさえしない。

「ねえ、早く一緒に食べようよ！　ねえ、早く！」

少年は食事を摂りながら苛立ったように言うが、シャルは無視をひたすら続ける。そんなことよりもずっと大事なものが目の前にあった。

「おい、シャル、返事しろ！　てめえ、いい加減にしろおお！」

少年が怒声を上げた。握っていたフォークを勢いよく壁に投げつけ、テーブルの上の皿を片っ端から乱暴に弾いた。部屋の中に、次々と皿の割れる音が響き渡った。

しかしシャルは意にも介さずに、左手薬指にはめられた銀の指輪だけをじっくりと見ていた。

完

あとがき

壁の庭のご愛読ありがとうございました。

ファンタジージャンルとしては奇異だったかも知れないこの中編も、ようやく完結を迎えることができました。

さて、この終わり方は如何だったでしょうか？ 恐らくは大半の方が不満だったかも知れませんか。今まで散々色々やってきておいて、何だこのオチは、と。

しかしながら今回の物語、執筆開始時からこの終わり方で決めていました。途中、予定外なものを入れていたりはしましたが、物語全体としては八割方は当初の予定通りにすることができました。

ちなみに。分かつていた方もいるとは思いますが、「ほとんどの」登場人物の名前の由来は「大聖堂」だったりします。

主人公のシャルトル（シャル）は、フランスの都市・シャルトルにある「シャルトル大聖堂」。

ケルンは、ドイツの都市・ケルンにある「ケルン大聖堂」。

ピサは、イタリア・ピサ市にある「ドウオモ広場」の「ピサ大聖堂」。ご存じ、「ピサの斜塔」を鐘楼として大聖堂ですね。

ソフィアは、ウクライナのキエフにある「聖ソフィア大聖堂」。パルテノン、ギリシャの「パルテノン神殿」から。ローマ帝国の時代に大聖堂として改装されたことがあったりします。

さてここで、仲間外れが一人いたりします。本編中では「紳士」としてお馴染みのゴアです。由来はインド・ゴアの聖堂。「大聖堂」ではなく、「聖堂」だった、と。この「壁の庭」の環から僅かに外れている人物という暗示だったりしました。

結局、この物語の主題は何だったのか。果たしてシャルとケルンは、いつかこの「壁の庭」から抜け出すことができるのか。その時ゴアは、どうするのか。それらは読者の皆さんの想像にお任せしま

す。

作者の手から離れ、読者の方々によって無限大に世界が広がっていくことが、物語にとっての最高の至福である気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160e/>

壁の庭

2010年10月8日15時47分発行